
AKB24 ~ THE PRESENCE ~

ももタロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A K B 2 4 ｾ T H E P R E S E N C E ｾ

【Nコード】

N 2 9 4 2 X

【作者名】

ももタロウ

【あらすじ】

A K B バトル 正規メンバーVS研究生！ 秋元康の考えとは！
？ 勝負の結末は！？

第1話 桜の花びらたち（前書き）

いやー、新しく連載書くことにしました。僕の設定で作った完全な
パラレルワールドです。だから、実在の人物関係ないんで、嫌い
にとかならないで楽しんで読んでください！

第1話 桜の花びらたち

ここはどこかの次元のどこかの地球のどこかの日本。そしてこの日本には、AKB24とゆうグループの存在があった。AKB24は秋元康プロデューサーがプロデューズした24人の女の子である。彼女らの共通点それはいずれも生まれた時から特殊な能力を持っているとゆうことだ。ある者は自然災害を生み出し、ある者は自身の一部を刃物に変えたりと神に選ばれし24名なのである。そんな彼女らは自身の能力を生かし、悪者退治への協力さらには人名救助や人助けなど、様々な分野で貢献している。また、そのルックスから不定期ではあるが握手会などのファン交流会も行われ、さらに彼女達はモデルやドラマなどメディアへも進出している。もちろん、これらのメディア進出がAKB24の本職ではないが、このAKB24を土台に夢を叶えようとする者もいるのは事実である。

そんな飛ぶ鳥落とす勢いの彼女達。だが、その多忙さゆえに本職の仕事を全うすることがどうしても不可能な場合がある。そういった彼女達「正規メンバー」に変わり、仕事を対処するのが「研究生」である。

彼女達「研究生」はAKB24結成時から3年後に集められた「正規メンバー」ではない23人である。彼女達もAKB24「正規メンバー」とほぼ同等の能力を持っている。

「研究生」の仕事は、ただAKB24のメンバーの誰かが何らかの事を出撃できないときにそのメンバーの代わり「アンダー」として出撃し、そのメンバーに代わって仕事をするのだ。

もちろん仕事はそれだけだ。余程のことがなければメディアに取り上げられることはないし、ファン交流会にもごくたまにしか出撃できないのだ。

そんな特に目立たなかった彼女達の運命を変える物語はここから始まる……………。

2000年3月、AKB24研究生トレーニングルーム。

彼女達「研究生」は東京都の某場所の劇場を借り、常に出撃できるようにトレーニングしている。それが彼女らの通常の日である。

またAKB24には「1期生」とゆうものがあり、いつの時期に入ったかにより、1期生、2期生と区別されるのだ。もちろんこれらにはそれなりの上下関係は存在し、現在は7期生までAKB24は募集し、「正規メンバー」は1期生～3期生までの24人。4期以降が「研究生」23人である。

3月とゆう残冬にも関わらず、部屋の中は非常に湿気が強く、部屋にある体温計は部屋温度を31度と示していた。

AKB24 5期生 指原莉乃

愛称さっしー

指原「腕立て一万回とか無理だよぉ〜」。

AKB24 5期生 仁藤萌乃

愛称もえの

仁藤「9998、9999、ああ、もう無理…。」

AKB24 5期生 北原里英

愛称きたりえ

北原「9998、9999、10000!!よきたあああ!」

北原は腕立てしすぎてガチガチの腕を上にあげ喜んだ。

AKB24 4期生 倉持明日香愛称もっちい

倉持「みんなすごいね、私なんて5000回もいかないのに…。」

AKB24 4期生 佐藤亜美菜愛称あみな

佐藤亜「いや、5000できれば十分かと…。」

AKB24 6期生 高城亜樹
愛称あきちゃ

高城「何気に小森も腕立てやってるね！今回??？」

AKB24 7期生 小森美果
愛称こもりん

小森「30000回です。」
当たりはシーンとなる中、

AKB24 7期生 佐藤すみれ愛称すーちゃん

佐藤す「あっっはっはっはっはっ!!!!」

指原「うそだ！小森は指原より腕立てを始めたの遅いし、腕立てス
ピードも指原よりおそいじゃん！それでなんで指原より回数多いの
？うそつかないですよ。」

小森「ほんとですよ!」

佐藤亜「小森、30000回の間違えじゃない!?」(汗)(「

小森「あ……………そうですね。」

指原「もう~~~~、ほんとウザイ小森!!」

そんな普段と何気ない会話を楽しむ彼女達。その瞬間……

まるで耳の鼓膜がやぶられるようなドアを大きくけやぶる音がする。
全員は突然のことに耳をふさぐ者、驚いた者もいた。
そんなドアをけやぶったのは

AKB24 5期生 宮崎美穂

愛称みやお

宮崎「みんなああ~~~~戸ヶ崎さんと秋元先生がねえええ
来たよおおお~~~~」

AKB24 4期生 大家志津香愛称しーちゃん

大家「みやお、そんなうるさくドアをけやぶんなくても……。」

AKB24 7期生 前田亜美

愛称あーみん

前田亜「びっくりしましたよ、もう。ほんとにまゆげボーンなるとこでした。」

AKB24 5期生 内田真由美 愛称はうっちー

内田「みやお、戸ヶ崎さんと秋元先生が来たって言ってたけど……」

劇場の扉が開く。そこにはAKB24プロデューサー秋元康とAKB24支配人の戸ヶ崎智信が立っていた。戸ヶ崎支配人はAKB24を陰ながら支える、ポジションで言う管理官もしくは司令官である。

その2人のオーラは劇場を包み込む。

戸ヶ崎「みんな、きちんとトレーニングしているかな？」

宮崎「もちろん！！もうバリバリですよ。」

仁藤「さっきまでポケモンやってたじゃん！」

宮崎「萌乃！！あ、やってないっすよ！」

秋元「……………」。

秋元康の鋭い眼孔は宮崎を睨む。

宮崎「……………休憩にほんのちよつとだけ。」

戸ヶ崎「あのなあ、宮崎……………」。

秋元「ふっ！メリハリをつけてマイペースにやるのが宮崎のスタイルだ。それもいいだろう。」

AKB24 7期生 松井咲子

愛称さきこ

松井咲「あの、2人はなんでいらっしやっただんですか？」

AKB24 5期生 中塚智美

愛称くりす

中塚「ただ、私達のトレーニングを見にきたわけではないですよね？」

秋元「……………」。

秋元康はしゃべらない。沈黙が走る。何故このような沈黙が起きるかはメンバーにはわからない。だが、その沈黙を破るように秋元康は口を開く。

秋元「お前達、上に行きたいと思わないか？」

周りの空気はどよめく。「正規メンバー」がいる現実、彼女達は前に出ることはないし、彼女達の夢も叶えられないのだ。

「上に行きたい！」誰もが心の中でそう思っていた。

AKB24 7期生 菊池あやか愛称 あやりん

菊池「私は行きたいです、例えどんなことをしても！」

AKB24 7期生 鈴木まりや愛称まりやんね

鈴木ま「私も！」

秋元康は口唇だけで笑みを浮かべ、

秋元「ならば……彼女達「正規メンバー」と戦ってみなさい。」

AKB24 6期生 野中美郷

愛称みちや

野中「……………戦いですか？」

秋元「うむ……実はな数ヶ月前からネットの掲示板にこんな書き込みがされ始めたのだよ。」

そういうと秋元は数枚の紙を研究生メンバーに渡した。渡された紙を覗きこむ研究生メンバー達。

「正規メンバーより、研究生メンバーのほうが強いんじゃないか。」

「研究生は正規メンバーの代わりだけであとは出られないとかかわいそう。」

「研究生はただ、目立たずAKBをやってるのか。悔しいな、自分は何気に研究生の方が好きなのにな。」

など様々な書き込みがあったのだ。

その紙を見て、涙を浮かべる研究生メンバー達。「自分達の存在がきちんとして認識されているとゆうこと」

「自分達を応援してくれるひとがいること」

を実感できたのだ。

秋元「その書き込みは思いのほか多くてね……。現実、AKB24と言ったら彼女達「正規メンバー」しか印象にないだろうし、それは下の君達の成長につながる。そして君達自身もAKB24として努力してきたのにあまり表舞台で活躍できないとゆうのは悔しいし、このままでは君達一人一人が持つ夢も叶えられない。そこで……………」

全員が息を飲む。

秋元「君達がどういう存在でどうゆう思いでAKB24を続けているのかを今後たくさんの人に知ってもらうことができるチャンスを用意に与えることにしたのだよ。」

秋元プロデューサーは続けて話を続ける。

秋元「つい最近までアメリカで開発されたバーチャルマシン『キューブ』。この『キューブ』はその人間の能力、性格などを読み取り、

そしてそれらを継承したままその人間の意識だけを架空世界に飛ばすことができるのだ。」

AKB24 5期生 近野莉菜 愛称 チカリーナ

近野「まったく意味がわかりません。」

秋元「まあ、簡単に言うと、架空世界にお前達を飛ばすんだ。もちろん、その世界で傷を負っても現実世界では何もダメージはない。あくまで、脳がそのように感じさせるのだ。」

AKB24 4期生 中田ちさと愛称 ちいちゃん

中田「なるほど〜。」

秋元「眠って夢を見るだろう。その時、夢なのに現実みたいな感じがしないか？『キューブ』は要はそれと同じ原理だ。そのバーチャル世界で戦ってもらう。「正規メンバー」の座を賭けて。」

一同「……………」

秋元「ルールは「正規メンバーチーム」24人と「研究生チーム」24人の2チームに別れてもらう。勝利条件は「正規メンバーチーム」を全員倒すことだ。もしお前達が勝利したら、これからお前達を「正規メンバー」としよう。」

AKB24 5期生 石田晴香 愛称 はるきゃん

石田「あの……24人って私達研究生は23人しかいないですけど。」

秋元「ああ、君達のチームには最近私が見つけた新たな能力者を一人入ってもらおう。本当は今日来てもらう予定だったんだが、都合がつかなくてね。」

AKB24 4期生 藤江れいな愛称 れいにゃん

藤江「その子、どんな能力なんですか？」

秋元「まあ、それは本人から聞いたほうがいいかもな。」

ずっと黙っていた戸ヶ崎支配人が口を開く。

戸ヶ崎「実地日は今日から一週間後の午後一時からスタート。実地期間は約2週間だ。まあ、詳しい事情はまた追って説明したり当日説明するが、最後に何か質問はないかな？」

AKB24 7期生鈴木紫帆里 愛称 しほりん

鈴木紫「私達が架空世界にいる間、AKB24の活動はどうするんでしょうか？」

戸ヶ崎「その心配はいらない。こちらでの対応は考えてあるのでな。他には……。」

指原「あの…ほんとにやるんですか？」

秋元「もちろん。なんだ、指原はやりたくないのか。」

指原「いやちょっと……。」

宮崎「なんだ、さっしー怖いのか？」

指原「こ、怖くはないよ!」

藤江「その気持ちもわかるけどね。」

高城「でも私の力がどのくらい通用するのか試したい。」

北原「私も！今みたいな状況じゃあ、何も変わらないもの。」

仁藤「やるうよ、さっしー！」

指原「ま、まあ、みんながいるもんね、大丈夫だよな！うん大丈夫
！」

小森「でも実際危険かも。」

指原「なんでそういうこと言うの！？今せっかくやる気だったのに
！！！」

小森「よしやるぞほら、さっしー！」

指原「だから、やるって言ったじゃん今！！しかも、その上から目
線！！もうほんと小森やだ！」

それまでシビアな空気がみんなの笑顔でまた和やかになった。

松井「やっぱり指原と小森はいいコンビだね！」

内田「まあ、実力と運次第だよ！みんな頑張ろう！」

戸ヶ崎「では、我々はこれで失礼するよ。」

そう言い、秋元プロデューサーと戸ヶ崎支配人は劇場を後にした。

第2話 DEAR MY TEACHER (前書き)

2話目書きました。多分、この時点でだいたいのメンバーの性格はオリジナルと若干異なってきたりですね！まあ、楽しく読んでください。
ああい。

第2話 DEAR MY TEACHER

あれからすらすらと時は流れ一週間経ち、ついに対決当日を迎えた。

あの日からこの対決については、メディアでも取り上げられた。

もともとこの日はAKB24はさいたまスーパーアリーナでのファン交流会だったため、ファン交流会のイベントとして、この対決は行われることになった。

午前9時30分一台の大型バスがアリーナの裏側に到着。中からは「研究生メンバー」23人が降りた。

23人はすっぴんの者もいればちゃんとメイクしてきている者もいる。23人は歩きながら待合室に向かう。

AKB24 7期生 岩佐美咲 愛称 わさみん

岩佐「久しぶりに外でたよお！」

菊池「わさみん一週間前から風邪引いて休んでたもんね！今日来て大丈夫だったの？」

岩佐「うん。お医者さんからもOKでたしね！」

前田亜「やっぱり、能力使ったから…？」

岩佐「まあ、風邪なんて大したことないよ。」

野中「なんかすごく緊張してきた。あの日はみんなであんな啖呵切ったけど、実際に勝てるのかな…。」

高城「もうここまでできたんだし頑張ろう！自分たちの力を信じるだけ。」

中田「でも、特にヤバいのは「正規メンバー」の【神7】だって！私達で太刀打ちできるかどうか…。」

【神7】…AKB24の中でも強さ、人気が特に高い7人のメンバーをそう呼ぶ。前田敦子、大島優子、篠田麻里子、板野友美、渡辺麻友、高橋みなみ、小嶋陽菜がその7人である。

石田「どーせ無理だよ。」

大家「はるきゃんもまだ戦ってないのにそう言わないの！」

そんな会話を交わしながら待合室に着いた。開始時刻は午後12時30分からだ。みんな待合室に着くと、メイクに行く者なり食事をとる者なりと様々な自由行動がとられた。

時間は刻一刻と過ぎていく。針が一回動く度に決戦の時は近づいているのだ。

倉持「そう言えばさ、私達のあと一人の仲間来てないね。」

佐藤亜「さっき戸ヶ崎さんに聞いたら、京都から来るみたいなんだけど電車が少し遅れてるみたいよ。」

佐藤すみれ「あー、無理だよお、怖いよお〜。」

宮崎「どしたの？」

鈴木紫「さっきからこんな感じで…みやおさんなんか言ってやってくださいー！」

宮崎「すみれ……………俺とゆう王子がついてるううう！……！」

佐藤す「あっっっはっはっ!」

鈴木ま「咲子よく食べるね!」

松井「うん!戦うにはまず腹ごしらえしないとね!」

近野「じゃあ、私も食べよう!う!いっぱい食べて、絶対に勝つてやる!」

???「勝つって、私達にか?」

ドアがいつの間にか開いており、そこには神7の高橋みなみ、大島優子、小嶋陽菜が立っていた。

佐藤す「み、み、み、みなさん、どして今日は?」

AKB24 キャプテン 1期生高橋みなみ 愛称 たかみな

高橋「いやあ、今日の挨拶しに来たんだよ!」

AKB24のキャプテンとして日頃から「研究生メンバー」まできちんと気にかけている高橋みなみも今日ばかりは少し雰囲気は違った。

AKB24 2期生 大島優子 愛称 ゆうこ

大島「見に来てみたら、ガチガチちゃん！ちゃんと勝負できんの？」

大島の突っ込みは痛いところを指した。……緊張してないわけではない。明るく振る舞っているのもそうだった気持ちを極力打ち消すため。大島の一言で空気が重くなり始める。

高橋「勢いだけじゃ、私達は倒せないわよ。」

AKB24 1期生 小嶋陽菜 愛称 にゃんにゃん、こじはる

小嶋「そうそうー！」

高橋と小嶋の一言で空気はさらに重くなる。

ほんの数秒前に時間をさかのぼる。指原はメイクを終え、待合室に

戻るところだった。

指原「さあて、とりあえずブログを更新しようかな！」

そんな中待合室に入ろうとするとなぜかドアを開くのをためらってしまった。

まだ中に入っていないのに部屋の中から緊迫した空気を感じる。中を覗いてみた。

なんと高橋みなみと大島優子がいるではないか。

指原「(うわー、優子さんとたかみなさんとこじはるさんだあ。だからこんな空気なんだあ！落ち着け指原、どうする指原。部屋に入っであいさつするか、トイレに引きこもるか…。)」

指原は目を閉じた。だが、目を開いた時にはドアを開けていた。

ドアが開くと、部屋の中の人は全員指原に注目する。そして高橋達に指を指し、

指原「たかみなさん、こじはるさん、優子さん。「正規メンバー」

の座は必ずいただきます！絶対に負けないから覚悟してくださいね！！指原クオリティー喰らわせますから！」

メンバーのほぼ半分は開いた口が塞がらない状態であった。神7にそんな大それたことを実際に思っけていても口にするなんて……。部屋の中はさつきよりも空気は重くなった。

指原「（あれ、空気が余計に重くなった？今、言ったことはちょっと違った？ヤバイ、どうしようとりあえず謝らなきゃ！）……………ごめ」

指原が口から言葉を出そうとするど、

高橋「そう思っているのは指原、お前だけなんじゃないのか？」

指原「え！？」

大島「そうやって啖呵きつた奴は今この部屋には誰もいなかったよ。とゆうか反論すらなかったけど。」

指原「そ、それは……。 （頑張れ指原！）と、とにかくそんなプレッシャーかけてきても私達の心はぶれません！別に受け答えしなかつたって、今少し緊張してたって最後に勝つのは私達なんだからあ
あ……」

内田「その通りです!!」

高橋がそういうとメイクを終えた内田真由美も入ってきた。

内田「たかみなさん、優子さん、こじはるさん。私達は本気です。みんな少し緊張して言えなかっただけで気持ちは本気です。あなた達は私達の憧れでした。でも、今日その憧れのあなた達を超えてみせます!」

指原「そ、そうだ!超えてやる。(あー、うちーにおいしいとこ持ってかれたあ……。)」

高橋達は反対を向き、残りのメンバー達の顔付きをみた。さつきとは変わってみんな強い闘志を燃やしている。先程の指原達の言葉でみんな目が覚めたようだ。

優子「そう、私達と話すだけで弱気なんじゃ勝負になるわけない。今のあなた達を見てやっとやる気てきたわ!」

高橋「今日の勝負楽しみにしているぞ!」

そう言い残し、3人は部屋から出て行った。

小嶋「ゆうこ、たかみな、お腹すいた。なんか食べようよ!」

高橋「ごめん、これから秋元先生のところ行かなきゃだから、ゆうこ
と先に食べてて。」

小嶋「わかったああ!」

そして、小嶋達と高橋は待合室をでて、そこから別々に別れた。

待合室のドアが空く!!それは小森だった。

小森「みなさん、今たかみなさん見ましたよ!いやあ、オーラすご
くてあいさつしかできませんでした……。ってなんか、みなさ
んどろかしたんですか?特にさっしー、どうしたの座り込んで
じゃっ
て?」

指原「さっき、たかみなさん達ここにいたんだよ……。で、勝つと
か言ってすごい啖呵切っちゃった。」

小森「ほんとですか!?!じゃあ、最初にさっしーがやられますね。」

指原「そんな事言わないでえ!!!」

その指原の大宣言から時間は少し進み、メイクを終えトイレを済ませた北原里英・高城亜樹・仁藤萌乃は、トイレの帰り際に板野友美と河西智美に出くわしていた。

北原「ぜ、絶対に負けませんかからね!か、必ず勝ちますから!」

高城「そ、そうですね!絶対に負けませんかからね!必ず勝ちますから。」

AKB24 2期生 河西智美 愛称 とも〜み

河西「2人とも同じこと言ってる!!!かわいい!!!」

板野友美は顔を北原の顔に近づきささやいた。

AKB24 1期生 板野友美 愛称 ともちん

板野「……………ばああん!!!」

北原はびっくりして後ろに引く。それをみて大笑いする板野友美と河西智美。

仁藤「（完全になめられてるわね。）絶対今回は勝たせていただきます。こっちは確実な勝算だってありますしね！」

仁藤の言葉に表情が変わる板野と河西。

そんな時、北原達3人は後ろから迫り来るオーラにむしゃぶるいが起きた。この凍えるようなオーラは……。

AKB24 1期生 篠田麻里子愛称 麻里子（様）

篠田「どいてくれるかな？」

3人「す、すいません。」

怯えながらなんとなく道を開ける3人。

板野「やっぱり麻里子が放つオーラはやばいね！」

河西「もちろん、そろそろ行くところだね！ばいばい！」

そう言い、板野と河西はその場から立ち去った。

高城「あれが…麻里子様。」

北原「近くで見るとやっぱりオーラやばいよ、麻里子様はあああ
~~~~。」

仁藤「確かにすごかったね……。」

沈黙した空気が流れる。北原はその空気を変えようと

北原「そうだ、せっかくだからアリーナのステージ見に行かない。  
ほら、私達実際あんまり来たことないしさ。」

高城「いいね、行くところよ!!」

仁藤「気晴らしになるかもね!」

ステージに向かう3人。途中で菊池あやかと合流した。

菊池「3人はこれからどこ行くんですか？」

高城「ステージを見に行くの！あやりんも一緒に行く？」

菊池「行きます！！」

こうして4人でステージに向かうことになった。ステージにはまだ客は入っていない。まだ入場開始時刻にはなっていないからだ。ただ、ステージの裏側やその他周辺にはたくさんスタッフが石橋を叩いて割るくらいのチェックをしている。

ステージに着くと、菊池は走り出しステージの真ん中に立った。

菊池「ステージっていいですよ、立つてるだけで輝けるんだもん！いつかこのステージの真ん中に立ちたいなあ！」

北原「やっぱりす、す、すごいな、やっぱり広いなあ！」

高城「うん、広いな！」



仁藤「そういえば、あやりんってさ昔…。」

仁藤が聞こうとした事を遮るかのように

菊池「みなさんに夢があるように、私にも夢があります。その夢を叶えるため今日は頑張りましょうね。」

仁藤「う、うん!！」

菊池「さっきもさっしーすごかったんですよ。たかみなさん達に勝つんだって本人を前に言っでしまいましたからね!！」

北原「ほ、ほんとに!?!あのさっしーが?」

高城「すっい……。」「

菊池「だから、私達も負けてられませんよね。」

会話を楽しむ4人

北原「そろそろ待合室に戻る??」

仁藤「そうね、私達まだご飯食べてないしね。」

菊池「じゃあ、戻りますか。」

4人が戻ろうと振り返った瞬間、逆方向から歩いてくる2人の人影。神7の1人、渡辺麻友と神7の次に強いと言われている柏木由紀である。

AKB24 3期生 渡辺麻友

愛称、まゆゆ

渡辺「みなさんこんにちわ。みなさんもステージを見にきたんですか？」

高城「え、ええ。」

渡辺「なるほど。」

仁藤は気づいていた。菊池あやかは2人が登場してから2人に対して強い視線を向けていることを。

AKB24 3期生 柏木由紀

愛称 ゆきりん

柏木「久しぶりあやりん！」

菊池「ええ、久しぶりですね…。」

不穏な空気が流れる。

菊池「あの萌乃ちゃん達、先に帰ってきてくれます？私この2人と話したいことがあるので。」

仁藤「わ、わかったわ。」

断ることはできないくらい静かだけど重みのある口調。菊池をステージに残し、仁藤達はステージを後にした。

北原達が待合室に着くと、指原は北原に抱きついた。

北原達が待合室に戻ると菊池あやか以外は全員揃っていた。北原達3人は菊池が言っていた指原大宣言を聞いた。と同時に北原も篠田麻里子達との遭遇話をした。彼女達の心にある共通の目的は一つ！

## 【正規メンバー奪取】

指原「へえー、そんなことがあー！」

豚生姜焼きを食べながら言う指原。

北原「しっかし、りのちゃんも案外言うね！」

カツカレーを食べる北原。鶏肉定食を食べる高城と仁藤。

そんな食事をしながら何気ない会話をしていると戸ヶ崎支配人が入ってきた。

戸ヶ崎「30分後に段取りとりハーサルをするから遅れないように。」

そう伝えると戸ヶ崎さんは待合室から出て行く。それと入れ替わりに菊池あやかが戻ってきた。

佐藤す「あやりん！！どこ行ってたの？なかなか戻って来なくて心配したよ！」

菊池「ごめんね！」

野中「あやりん、30分後に段取りとかをステージでやるって今戸ヶ崎さんが言ってきたよ。」

菊池「あ、そうなんですか。教えてくれてありがとうございます。」

一方、「正規メンバー」待合室では高橋みなみがリハーサルのことをみんなに伝えていた。

高橋「とゆう訳だからみんな遅れないようにね。」

話が終わると1人の女子はすぐさまソファで寝始めた。

高橋「ちゃんと理解した、あっちゃん？」

A K B 2 4 エース 1期生 前田敦子 愛称 あっちゃん

前田敦「わかったああ〜〜30分後におこしてねええ〜。」

高橋「ふうい。はいはい!」

こうしていよいよ対決の時は迫る。現時刻はただいま午前10時30分。

### 第3話 スカート、ひらり（前書き）

AKB24「研究生」まだ来ていないラスト1人メンバー、ファンなら今回ので多分気づくと思います（・-・ハ\*）ノ

### 第3話 スカート、ひらり

リハーサルなども終わり、いよいよ対決開始時刻が迫る。観客も入場し始め、会場内はざわついていて、話題のトークはもちろんだらう。の対決についてだろう。

時刻はついに午後12時30分を回る。音響が鳴り響き、客席もさつきとはまた違ったざわつきが起こり始める。

「A、K、B、24〜〜！」

と同時にAKB24の（正規メンバー）24人と（研究生メンバー）23人の計47人が登場した。

メンバー登場と同時に会場内の盛り上がりが増す。

観客A「あっちゃややん！！！」

観客B「麻里子様あああ！！！」

観客C「まゆゆ〜〜〜！！！」



観客の大半の叫び声は大半（正規メンバー）特に神7に向けられるものが多く、（研究生メンバー）に対しての応援はほとんどなかった。

手を振る（正規メンバー達）。「研究生メンバー」は歯がゆい気持ちになるが、そんな心のなかですっと念じていた。『この声援は今度は自分達に向けてやると…』

メンバー達が一列に並ぶと、最後に奥から黒いスーツを纏った戸ヶ崎支配人が登場する。戸ヶ崎支配人は一礼をし、書類を広げる。観客達は静まり返る。

戸ヶ崎「これより、AKB24【新、正規メンバー決定戦 ソウルファイト】の開催を宣言いたします。」

観客は始まりを告げるその言葉に盛り上がる。そして、また戸ヶ崎支配人がしゃべり始める。

戸ヶ崎「これからソウルファイトのルール説明をいたします。なお、初めにAKB24の「研究生メンバー」の1人が電車の遅延の関係で現在不在なのを謝罪申し上げます。」

そう言い、戸ヶ崎支配人は一礼した。観客達や47人のメンバーはそれを静かに聞いていた。

戸ヶ崎「さて、ここでこの【ソウルファイト】のルールについて説明して行きたいと思います。」

戸ヶ崎支配人は今回の【ソウルファイト】について説明を始めた。

## ソウルファイトルール

1、【ソウルファイト】はチーム制。どちらか片方のチームの全員が戦闘不能になった時点で決着。  
2、実施時間は架空世界で2週間（現実世界でゆう約2時間50分）もしそれまでに決着が着かなかった場合は強制終了し、その時点でチームの生存人数が多いチームの勝利とする。

3、対戦方式、戦い方は自由。どんな武器、戦略を使っても構わないとする。

4、AKB24メンバーは必ず一回は自身の能力を使用すること。

5、例え、一度敗北しリタイアになっても条件に反していない場合の蘇生は認める。

戸ヶ崎支配人は他にも会場内でのマナーの諸注意などを話した。

戸ヶ崎さんはすべてを読み終わり書類を持った左腕を降ろした。そして、

戸ヶ崎「ソウルファイトの説明はこれで終了です。ではソウルファイトを始める前に最後に……メンバーからファンに一言！AKB24 リーダー 高橋みなみお願いします。」

高橋「はい。えー、今日は正規メンバー決定戦とゆうことで、まずはみなさん本日はお集まりいただきありがとうございました。」

高橋みなみとその他メンバーは一礼をする。客席からは拍手や喝采が送られる。

高橋「私達の今日の意気込みとしては……全力でやります。何せ、先ほど楽屋である1人の（研究生メンバー）に宣戦布告されました。」

客席からは喝采と同時にヤジも飛ぶ。

高橋「そうだよな指原!？」

指原「ええええ　！」

いきなりのむちゃぶりにとまどう指原。

指原「（こんなたくさんがお客さんが見てる目の前であんな大それた事また言えないよ……。」

高橋は指原にマイクを渡し、

高橋「もう一度あの意気込みを聞かせてみなよ！」

指原のマイクを持った手は震えていた。みんなが見ている。しかもその大半は「正規メンバー」のファン。行きすぎた発言はアンチを作る。

……指原は逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。涙がでるかもしれないと思っていた。しかし、そんな時客席から

観客G「がんばれええ！」

観客K「負けるな！」

指原はその言葉を聞き逃さなかった。そして改めて実感した。自分を応援してくれるお客さんは少人数かもしれないけどいると……。気にしちゃいけない！ましてや、さっき啖呵は切った。後は踏み込

む勇氣だけ。

指原はマイクを口元に近づけ

指原「……じゃあ……正直に言いますよ！私いや私達だって……正規メンバーになって夢を叶えたいんです！いつまでも先輩の後ばかり付けてちゃ、だめだから！自分達の力だってお客さん達に認めてほしいから。だから、だから……。」

指原「優子さんも、篠田さんも、ともちんさんも、まゆゆも、こじはるさんやたかみなさん、そして前田敦子さんも、みんな……」  
「なやつつけてやるんだから！」

………周りの観客は啞然とした。笑いだす観客もいた。いずれにしても、言葉で伝えるには難しい空気になったのは間違いない。

もちろん観客の何人かはヤジを飛ばしている。そんな様々な反応をする観客であった。

だが、指原はずっと「正規メンバー」に指を差し、視線は向けたままだった。もう引くわけにはいかないから……。

高橋はにこっと笑い、指原からマイクを取り、

高橋「やっぱり、さっき私に言った発言は本気なんだね！よし、じやあこつちも私達「正規メンバー」の素直な気持ちをあなた達に伝えるわ！言ってやって、あっちゃん！」

と、マイクを前田敦子に渡す高橋。きよとんとした顔でマイクを受け取る前田敦子。

前田敦子「……………まず、いきなりむちゃぶりするたかみな。みなさん、これなんなんでしょうね!？」

前田敦子の独特の嫌みなようなでも愛嬌にある発言に観客やメンバー達は笑いに包まれた。マイクを高橋に帰す前田敦子。

高橋「ちょっとちょっとあっちゃん!!そんな事言わなくても!ここはエースとしてビシツと言ってやってくださいよ。」

再びマイクを前田敦子に渡す高橋。前田敦子はマイクを口元に近づけ、

前田敦子「……………まあ…かかってきなよ。私達が負けるわけないけど。」

前田敦子の返しに会場内から喝采の嵐が吹く。少しの言葉で会場を盛り上がらせ、ステージにいるメンバー全員の闘志を燃やす一言をここぞとゆう時に言う。これがエースなんだと指原、いや全メンバーは感じた。

前田敦子は戸ヶ崎支配人にマイクを渡す。

戸ヶ崎「盛り上がったところでいよいよ、『ソウルファイト』を開始致します。これよりメンバーには「キューブ」が設置されている部屋に行ってもらい、「キューブ」に乗り込み、準備してもらいます。そして13時に【ソウルファイト】スタートです！！それではAKB24メンバーのみなさん、部屋に向かってください。」  
そう言い、メンバー達と戸ヶ崎さんはステージの奥に入っていく。

観客V「優子~~~~~!!!」

観客W「ともち~~~~~ん！」

観客の声援はメンバー退場後も【正規メンバーに向けられるものが多かった。メンバー達は観客の声援に応えるように手を降ってステージの中の方へ消えていった。

だが、そんな中にかすかな応援はちゃんと存在していた。

「研究生メンバーがんばれ。」

47人は「キューブ」のある部屋に向かった。先程のリハーサルで「キューブ」のある部屋にはメンバー全員は来て全員驚いたが、48体の「キューブ」はさいたまスーパーアリーナの地下に設置されていたのだ。

「キューブ」は縦2M、横1M50CMの四角形の形をしたマシンである。色は透き通った鮮やかなブルーで外側からだとはわからないが、内側には様々なメカが装着されている。

さいたまスーパーアリーナの地下は普段は使用される機会はありませんでしたが、現在は使用されていなかったが、今回48体の「キューブ」を設置できる場所が欲しいと提案したところ、このさいたまスーパーアリーナ地下が明らかにされたのである。

地下と言っても地上との電波はきちんとつながっており、電気の供給もきちんとされている。そのため、「キューブ」ももちろん機能することができるのだ。もちろん48体の「キューブ」を置くスペースも健在だ。

「キューブ」の部屋に着いたメンバー達。2回目なのにまた驚いてしまう部屋の広さとメカの多さ。地下と行ってもレンガの壁で覆っているのだが、辺り一面その壁を覆い隠すような様々な機械が設置されている。



AKB24 1期生 峯岸みない 愛称 みいちゃん

峯岸「やっぱりすごいね、さっきも見たけどまたすごいって言うちやうよ!」

AKB24 2期生 宮澤佐江 愛称 さえ

宮澤「機械やこれのマシンを見ると、本格的だなって思うね。」

AKB24 2期生 秋元才加 愛称 さやか、オカロ

秋元「まじ、気合いはいるわ!ウホツ!」

戸ヶ崎「えー、じゃあマシンに乗り込み、スタッフの指示に従ってください、」

メンバーは1人1人マシンに乗り込んで行く。スタッフ達はマシンについての説明や注意事項を説明。

そしてすべての準備は整った。後はすべてのコンセントが集まって

いる壁にあるレバーを下ろせば、スイッチは作動しついに【ソウル  
ファイト】が始まる。

開始30秒前。すでに会場ではカウントダウンはスタートしており、  
数分前からメンバーはもちろんスタッフや観客もそのおびただしい  
空気を感じていた。

みんなの心にある2文字【勝利】のためAKB24の闘いが始まる  
うとしている。

開始10秒前になると観客達もカウントダウンを言い始めた。

そして13時ちょうど。スタッフがレバーを引くと「キューブ」は  
輝きを放つ。その閃光は手で目を隠すくらいにまぶしかった。

と同時にAKB24メンバー、47人の意識はすでに架空世界に飛  
んでいた。

今、様々な想いを賭けたAKBの新たなバトルが幕を明ける。

#### 第4話 青空のそばにいて(前書き)

いやー、48人のキャラ付けきついですね。松原夏海さん絶対こんな人じゃないでしょ!!!笑

## 第4話 青空のそばについて

ここは架空世界。現実世界に実際に存在する町や景色、場所をモデルに作られた架空の世界である。

そんな架空世界のとある位置に一人のAKBメンバーが転送されてきた。指原莉乃である。指原が目を開けると、そこには砂の地面からいくつもの岩場がそびえておりその高さは一つ10mはあるであろつ。

天候は晴れ。気候は春。架空世界での時刻は13時。

指原「ここが架空世界かぁ。思ったたより普通だなあ。現実世界にありそうな景色なんだね。」

架空世界のもう一つの特徴は空気感や重力、景色の色彩感は一定の場所を覗き現実世界と同じにしているのが特徴だ。

指原「……………ん、てか…ちょっと待って!」

指原は辺りを見渡しているとあることに気づいた。

指原「……………今、私一人？こんなこと聞いてないよ！なんで、周りに誰もいないの？もしかして、私だけみんなとは違う位置に着いちやっただのかなあ…。まじ陰謀だよ、これ！」

そんな時、指原の左腕につけてある黒い時計がなる。

指原「ん、私こんな時計付けてたっけ？」

時計には文字が表示されていた。

時計の文字「私は戸ヶ崎だ。みんな架空世界には到着したかな？今君たちが付けている時計は我々から通信を受けとることのできる連絡手段時計だ。その（ネク）に現在の戦況や勝敗を全員の時計に随時転送していく。もちろん通常の時計としても使用できるぞ！アラームとしても使えるしな！」

こうして、文字がどんどん転送されてくる。

ネクの文字「もう一つ、君達が最初に転送された場所はランダムだから、もしかしたら自分だけ間違えたとか思っている子がいたから、安心してくれ。隣りに仲間がいる者もいればいない者もいる。もしかしたら今隣りには敵がいる人だっているかもしれない。だから、いかに仲間と早く合流できるかが鍵だ。架空世界は様々な場所をモデルに作ったオリジナルな世界だ。君達にもそれ肌身を感じるな

がら頑張っしてほしい！では健闘を祈る。」

こうして、「ネク」の文章の表示が終わり、

指原「そっかあ。みんな違う地点に転送されたのか……。とりあえず転送が失敗してないことには安心したけど……。もし今「正規メンバー」と合流したらどうしよう……。……。しかも私さ、自分の能力わからないし。」

そう、なんとびっくり！！指原は自分がどんな特殊能力を持っているかは知らなかったのだ。

通常、特殊能力は使ったりすることにより自分がなんの能力かを把握できる。しかし、指原はここまでの人生で特に特殊能力を発動した感じはなかったのだ。

ちなみに世間では知られていないが、AKB24総合プロデューサー秋元康も能力者である。彼はAKBメンバーにも世間にも能力者と言っことは内緒にしている。だから、彼がどんな能力なのかは誰も知らない。

指原「秋元先生はどんな私がどんな能力か知ってるみたいだっただけ教えてくれなかったし……。自分の能力がわからないままだAKB24になつて、まあ身体能力はなぜか人より高かったから人命救助とかはできたけど……。」

「????」「さっしー?」

後ろから声がした。聞き覚えのあるでも、仲間の声ではないとなんとなく感じる指原。そこにはAKB24の正規メンバー 松原夏海が立ち尽くしていた。

指原「夏海さん!」

AKB24 2期生 松原夏海 愛称 なつつみい

松原夏海「だっは!やっぱりさっしーか!まさかの!」

指原「夏海さんこそ!こんな近くにいたなんて!ほんとよかったです。」

松原夏海「ぶっは!よかったって?」

指原「だって、私1人だったんで知り合いほしくて!」

松原夏海「うっは!そうかあ…私も会えて嬉しい。一番会いたかったもん…。」

指原「そんなつすかあ！？うれしいです！」

松原「ごっは！だって私達に勝つとか訳わからないこと言ってるムカついてたからさ。この私がさっしーの鼻へし折ってやるつもりだの！」

指原「え…？」

松原「忘れちゃいけないよ！ゲームはもう始まったの？今のあなたの敵は私。私の敵はあなたなんだもん！」

その瞬間松原の両腕は1M程の長さのドリルになった。

指原「ひいいい！」

松原「知ってると思うけど私の能力はドリル。私が今ムカついているあなたを貫くにはふさわしい能力ね！」

松原はドリルに変えた右手を指原に向ける。ドリルが動き出す。

指原「ま、待って夏海さん。」



松原「もっは！いくよ~~~~~！」

指原「ま、まだ心の準備があ~~~~~！！！」

松原は右手ドリルで指原の体を貫こうとする。指原はそれを紙一重で避ける。しかし、追撃の左手ドリルが指原の首に。

指原「ひゃああああ！！！」

指原はなんとか首を沈め回避。松原夏海の猛攻は続いた。松原は素早く、避けたと思ったらすぐに追撃が来る。

松原は指原の足を狙う。指原は上にジャンプし、回避する。しかし、

松原「おっは！空中では身動きとれないでしょ？」

指原「はっ！！！」

指原は空中で2段ジャンプし、松原夏海の後ろに飛んだ。

指原は振り返り松原を見る。 見つめ合う2人。

松原「べっは！指原、思ってたより動きいいんだけど！」

指原「（ちょ、ちょっと）夏海さん本気だよお！！運良く回避できたけど、このままじゃあつという間に臨終だよお！」

指原はあたり一面を見渡し、何かに気づく。そして、

指原「あ、あれはなんだ！」

指原は松原が後ろを向いた瞬間に岩場に向かって走りだし、岩場の後ろに隠れた。

松原「なにもないじゃ……いない……指原めえ……騙して隠れたのね！ム力つく〜〜！」

指原「（ふう、なんとか隠れた。でもこんな近くじゃすぐに見つかる。もっと遠いところへ！）」

指原は松原の位置を確認し、バレないように奥の方の岩場へ隠れる。

指原「はあ、はあ。なんか緊張とかかな、もう息が上がり始めてる。とりあえず、まずはこの状況を変える方法を考えなきゃ。」

「ギギギギギギ」

その瞬間指原がかくれていた岩場の中からドリルが突き抜けてきた。

指原「きゃ！！！！！」

あと、数センチ右だったらドリルが背中を貫いていた。

松原「てっは！やっぱりそこか！勘で岩場貫いたけど当たるなんてついでる！もう一回いくよ！」

指原「嘘でしょう！？こんなすぐ場所が割れるなんて！急いで遠くへ逃げなきゃ！」

松原はまたドリルで岩場を刺す。岩をも砕くぎしきしした音が恐怖を与える。

指原はその岩場から逃げようとする！

しかし、松原はドリルを連続で刺しその岩場を砕き、指原に襲いかかる。

指原「うっ！」

松原「ええい！」

松原のドリルは指原の左肘をかする。

指原「うっっ！」

指原の左肘から少量の血しぶきが飛ぶ。

指原「い、痛い。痛みまでリアルに再現されてる。」

松原「痛いよねえ。でも指原にムカついてるから、そんなことどうでもいいやー！」

指原「（うっ…痛いよお。死んじゃうよお。）か、簡単には負けないわよ。」

松原「簡単に負けるよ。次がラストだもん！」

松原の両腕ドリル攻撃。指原はそれを回避。松原は両腕ドリルの分スピードが落ちているのだ。そのため指原はその一瞬を見極め回避する。

指原「（自分の能力がわからない以上下手に攻撃はできない。攻撃したらドリルの餌食だわ。あ~~~~秋元先生に食い下がって自分の能力聞くんだった！！）」

指原はそんなこんなでドリルを回避していると、

松原「はあ、はあ、なんで当たらないの！」

指原「（おっと、夏海さんの体力が減ってきてる！ようし、とりあえず避けまくって体力切れを……）」

松原「には！避けて体力切れを待つ作戦を考えてるみたいね~~~~ムカつく~~~~。こうなったら……！」

松原は地面をドリルで掘り出した！砂地の地面を掘ると砂しぶきが指原に飛ぶ！

その砂しぶきは指原の目の中に入ってしまふ。

指原「きゃっ！」

松原「あっは！どつやら砂しぶきで前が見えないようね」  
目を押さえ目を拭く指原。しかし、視界はまだぼやける。

松原「こっは！さあて、私じわじわとか嫌いだからあっさり心臓を貫くね！でやあ　！」

指原「（やだ死にたくない！助けて！）」

松原「だやあああ！！！」

気づくと松原夏海は悲鳴を上げていた。

指原「え！？な、何？」

視界が回復し目を開ける指原。紅葉の炎に右腕を焼かれ苦しんでいる松原夏海の姿が・・・。

そして、指原の目の前に1人の人間が立っていた。

???「大丈夫？りのちゃん。間に合ってよかったあ！」

指原は涙ぐむ。それはうれしさと安心感からこみ上げた涙なのかもしれない。うなぎ犬に似たその彼女の腕は炎に包まれていた。

指原「りえちゅわわん!!!」

彼女はそう 炎 の能力者 北原里英。

北原「りのちゃん、りのりえは……ガチです！」

北原のウインクとガッツポーズ！指原は北原に抱きつく。

指原「りえちゃん。ほんとありがとうありがとうありがとうありがとう……!!!」

北原「そんなお礼言わなくても！」

指原「もう、ありがとうありがとうありがとうありがとう!!!」

北原「しっしっいよ!!」

と言いながら抱きしめ続ける2人。

松原「あの!」

2人はようやく正気にかえる。

松原「私のこと忘れてるとかムカつく!!!まだ負けてないんだからね!」

指原と北原は離れ、

北原「でもすでに片腕は燃やしましたよ!それに冷静に考えて夏海さんは近距離攻撃しかできないけど、私の炎は遠距離攻撃も可能です。さらにりのちゃんと戦い体力を消耗している。そんな夏海さんのほうがどう考えても今は不利ですよ!」

松原は凶星のような表情をするが、

松原「うっー、だやらあああああ!」

松原は叫び声を上げる。次の瞬間、左腕ドリルは灰色の気をまとっていた。



松原「きつは！この気はね今現在の私のフルパワーをこの左腕にためたの！利き腕じゃないからパワーは少し劣るけどこれに当たればあんた達はぐちゃぐちゃよ！！」

北原「……………」

松原「むっは！あんたもム力つくわ！死ねえ！！」

左腕ドリルを前にだし、襲いかかる松原。しかし北原は炎を宿した両手で松原の左腕ドリルを止める。

北原「私の炎はどんなものも燃やす！私の炎に耐えられるかしら。」

北原の両手の炎が強くなっていく。

松原「だやがああああ！！！！！」

松原の今にでも燃えきりそうな悲鳴が北原と指原に響く。

北原は松原の左手を押さえ離さなかった。そして、

北原「りのちゃん！私が夏海さんを押さえてるから早くトドメを！」

指原はハツとした。指原は能力がわからない。さらにはこんなへたれと言えど、日頃のトレーニングから、パンチの一撃で人間の心臓を貫くくらい造作もないことなのだ。  
しかし、

指原「できない、私にはできないよお…。」

北原「なに言ってるの？彼女は敵だよ！びびっちゃだめ！勇気をだしてー！」

指原「あわ、あわわわわ！」

北原「りのちゃん！！早く！！あの時言った指原大宣言は嘘だったの？」

指原「う、うそじゃないよ！で、でもいろいろ心の準備がさ！」

北原「りのちゃん！」

松原「だっは！」

松原は北原の一瞬力が抜けたのは利用し、北原の腕を振りほどいた。

北原と指原「ああっ！」

松原は後ろに下がり指原達とある程度距離を置く。

松原「かつは！ありがとね、ばか指原！おかげで恥ずかしき初の敗北者にならないですんだわ！とりあえず…このムカつく気持ちを持ちたまま今日は引きあげてやるわ！」

そう言い、松原は両足をドリルにし、穴を掘りモグラのように地面下へ逃げていった。

2人に沈黙が流れた。

北原「地面の下に逃げられちゃ、もう追えないなあ。はああ……………」  
りのちゃん！！！！！！」

北原は指原の方を向く。指原は待ってたとはかり土下座をしていた。

指原「ほんとすいませんでした！！ゲームと言えど、なんかまだ人を倒すの抵抗あって！わかってはいるんだけど。」

北原「ふうつ。もう顔あげて！でもりのちゃんのなんか、そういう優しさやっぱりゲームでも足引つ張るんだね！」

指原「ありがとりのちゃん！！！」

北原「まあ、マイナスに言うと、ただのびびりでへたれなだけだけどね。」

指原「言わないでえ！！！」

## 現在状況

正規メンバー参加数 24人

研究生メンバー 23人

## 第5話 会いたかった(前書き)

あんまり「殺す」とか「死」って言葉この小説で使うの抵抗ありますねえ。パラレルとは言え、実在する人物なので…。

## 第5話 会いたかった

指原達が松原夏海と戦いを終え、再び歩き始めた一方、仁藤萌乃は【ソウルファイト】開始から近野莉菜と野中美郷と合流した。

近野「これからどうするう〜〜?」

仁藤は目をつぶり始めた。

野中「何してるの?」

仁藤「今、私の【気】の能力でみんなの気を感じているの?」

野中「そっかあ、それでみんなを探していくんですね!」

仁藤「ただ、私の能力は気をさぐりそれがどの位置にあるかがわかるだけで気が誰のものかはわからないの。」

近野「そんなああ…。OH、MY、GOD!」

仁藤「だから、荒れている気を探しているの。気が荒れてるってことは、きつと戦闘中ってことだから!」

野中「はぁー、なるほどですねえ！」

仁藤「ん！荒れている気が2つあるわ！しかも1つは少し弱まってきたる。」

野中「すぐに行ってみましょう！」

仁藤「でも、ここからちょっと北に行つたとこなの！着いたころには戦い終わってるわよ。」

野中「どうしましょう！！」

近野「このチカリーナに任せなさい！！！」

そう言うと、近野はスポーツカーにチェンジした。

近野「忘れてましたか？私の能力は 乗り物変化 。自由に乗り物に変化できるんですよ！車で飛ばせばすぐ着きますよー！」





野中「ああん！？何で？」

仁藤「あはは…。やっぱりいいや…。」

野中「よっしゃ〜飛ばすぜ！GO GO HEAVEN!!」

野中は思いきりアクセルを踏んだ。車は飛び跳ねるかのような急発進。

近野「あ、あの美郷ちゃん！アクセルはもう少し優しく踏んでくれるかな？」

野中「ああん！ケチケチすんな！派手に行こうぜえ！」

近野「はっはいいい！（私のほうが先輩なのがいいい…。）」

仁藤「（私達3人ははつきり言って戦闘タイプじゃない。だからいかにして敵と遭遇せず仲間と合流できるかが鍵ね！）」

3人が向かう北の方で行われている戦い。

小林香菜・片山陽加 VS 中田ちさと・鈴木まりや

中田ちさと「くらえ！連続手裏剣！！！」

中田ちさとは小林香菜にむかって多数の手裏剣を放った！

AKB24 2期生 小林香菜 愛称かな

小林香菜「むだっすよ！」

小林香菜は両手に持っているマシンガンで全ての手裏剣を撃ち落としました。

小林「手裏剣の能力まああっすけど、私の銃・タイプ連射とは相性悪いっすよ！」

小林香菜は連射型の銃系を生み出す能力。中田ちさとは手裏剣を生み出す能力を持っていた。さらに2人にはちよっとした共通点があった。

中田「歳のせいかな。手裏剣の勢いが落ちたかな！」

小林「いやー、高校の頃からそんなもんしたよ！実力ないんすよ！先輩は！」

そう、小林香菜は中田ちさとと高校が同じで中田は小林の一つ上の先輩だったのだ。

中田「歳のせいよ！！絶対！！！」

一方、鈴木まりやと片山陽加の戦いでは、

鈴木ま「はあああああ！！！」

棒を振りかざし片山に襲いかかる！

AKB24 3期生 片山陽加 愛称 はーちゃん

片山「ふん、そんな棒で殴るだけの攻撃でよく勝とうと思ったわね！戦いのこぶしがきいてないわよ！」

片山は鈴木連続攻撃を回避。

鈴木ま「うるさい！私は、みんなと一緒に勝ってみんなと【正規メ

ンバー」になるのよ！」

片山「あんだ、なんの能力だっけ？」

片山は避けながら言う。鈴木は一旦攻撃を止め、

鈴木ま「棒 の能力よ！地味かもしれないけど、私この能力みんなの役に立つって思ってるんだから！」

片山「役に立たない能力はないと思うけど、地味な能力な癖して目立とうとするのは釈に触るわ！」

片山は指から縄をだし、鈴木まりやの両腕両足をしばった。

鈴木ま「う、動けない。これが陽加さんの能力 縄。」

片山「地味な能力はね、目立つちゃいけないの。地味な能力らしく裏方に回り輝くものをサポートするのが宿命。香菜、私が縄で抑えておくから、マシンガンで撃ち殺しなさい！」

片山は自分の後ろで戦っている小林香菜に言う。

小林「ういっす！覚悟しなまりやんぬ。」

小林香菜は中田ちさとから離れ、マシンガンを鈴木まりやに向ける。

中田「はっ！しまった！まりやんぬ！」

中田は小林追いかける。

小林「邪魔するなっす！！！」

小林は両手のマシンガンで中田の明日を打ち抜く。

中田「ぐわあああ！！！」

中田の左膝をマシンガンの弾が貫く。そして中田の苦叫が。

中田は左足を抑えその場で足をついた。

中田「あ、足が！！ううう、まりやんぬうう！！！」

鈴木ま「や、やめて！やめてよお！殺さないでえ。」

片山「惨めだな。殺れ、香菜。」

小林の不気味な笑みを浮かべマシンガンを鈴木に向け連射した。

鈴木まりやの体にマシンガンの弾が貫通する。鈴木まりやは叫ぶ暇もなくただ絶命する。見るには生々しい穴だらけの体になってしまった。

しかし、小林はそんな絶命した鈴木まりやの体にまだ打ち続ける。ただそこには純粹にその戦いを楽しんでいるとゆう思いしかなかった。

中田「もうやめてよ！まりやんぬをこれ以上……………」。

中田は泣きじゃくりながら小林に言う。小林は撃つのをやめる。そして、後ろを向き中田にマシンガンを向ける。

小林「ふうう。じゃあ次はちさと先輩あんだだよ！もう動けないっすもんね。

その瞬間、みんなの手につけている ネク に表示される。

【WINNER 小林香菜】

【LOSE 鈴木まりや】

【正規メンバー 残り24人 正規メンバー 22人】

ある場所では、

北原「え！？まさか まりやんぬ！」

指原「まりやんぬが…倒された。」

指原の呼吸が荒くなる。過呼吸に近い状態に陥る。

北原「大丈夫りのちゃん？」

……まりやんぬがやられた。架空世界での死とはいえ仲間が1人死んだのだ。辛くないわけがない。

指原「りえちゃ~~~~ん！」

北原「大丈夫だから！」

一方仁藤達も、

仁藤「まりやんぬ……………」

近野「どうしたの萌乃ちゃん？」

野中「私達今 ネク 見れないんだ教えろ！」

荒野を走る中、仁藤は近野と野中に鈴木まりやの敗退を告げる。

近野「そんなああ！！まりやんぬううう！」

近野は仁藤達が自分に乗ってることを忘れ、動揺し暴れてしまう。

野中「やめろチカリーナ！私達も乗ってるんだぞ！」

近野は正気を取り戻す。

仁藤「辛いよ。でも今後こうやってみんないなくなる可能性もある。今はこの死を受け止めていくしかないよ。」



野中「そうだね。」

近野「萌乃ちゃんの言う通りだね。」

一方中田ちさと自身もその画面を見た。もちろん小林香菜はや片山陽加、他のメンバーも見たであろう。いずれにしても【ソウルファイト】最初の敗退者であった。

中田「（くっ！逃げなきゃ！私も死にたくない。）」

なんとか立ち上がり、足を引きずり逃げようとする中田。だが、目の前には小林香菜が銃口を向け立っていた。

小林「どこ行くんすか？」

中田は怯えた表情を隠しきれなかった。それを見て不適に笑う小林。

小林「じゃあ、ちさと先輩にも死んでもらうつすよ！」

片山「待て！香菜。」

小林と中田は片山を見る。

片山「簡単に殺したら面白くないから……」

片山は自分の手から30センチほどのロープをだし、それを小林に投げて渡す。

片山「そいつで首を絞めて倒せ！マシンガンで撃たれた足の痛みと首を絞められ苦しい2つの痛みを味あわせながらな！」

小林「それいいっすね……！」

片山は気色悪い笑みを浮かべ、嬉しそうに小林も笑みを浮かべていた。

中田の顔は恐怖とゆう2文字しか頭にはなかった。自分の死の確定。そして苦しみながら死ぬ恐怖。

そして小林は背後に回り込み中田の首を絞める。

中田は小林の手を抑える。だが、自分にはどうすることもできない。ただ死を待つのみ。顔からは涙しか出てこない。

小林「先輩、高校ではいろいろ気にかけてくれたっすよね！そんな可愛い後輩に殺されて満足でしょ？ねえ、ちさと先輩いい！」

小林は思い切り力を入れる。そして、小林の両腕を掴んでいた中田の両腕は下にぶらんと落ちた。こぼれ落ちる涙と共に。

ネク に表示される、

【WINNER 小林香菜】

【LOSE 中田ちさと】

## 第6話 だけど…（前書き）

AKBのメンバーが実際にメンバー1人1人をとんな風に呼んでるかを知らないんでそこたまに間違ってるかもしれないんですが、よろしくお願いします！

## 第6話 だけど…

中田ちさとと鈴木まりやが敗退して20分経過した。

仁藤、近野、野中は近野の能力でスポーツカーで仁藤の感じた2つの気を発している地点に向かっていた。

仁藤「確か、この変のはずなんだけど……」

すると目の前に2人の少女が立っていた。佐藤すみれと岩佐美咲であった。岩佐と佐藤すみれはスポーツカーに乗っていた仁藤達に気づいた。

岩佐「あー、萌乃ちゃん達だ！」

岩佐達は手を振る。

近野「あ、あれはすーちゃんとわさみんだよお！よかった無事で」

近野達3人と岩佐達は合流することができた。

佐藤す「萌乃ちゃん、チカリーナ、みさとちゃん！ほんつとに無事でよかったですう！」

佐藤すみれは半泣きしていた。

岩佐「さっきまりやんぬとちさとちゃんが敗退したの見て私達もシヨックで、すーちゃんなんかさっきから泣いてて。」

仁藤「確かに、彼女達の敗退は私達にとってもこの【ソウルファイト】においても状況が動いたのは間違いないわ。」

野中「でも、いつまでも引きずってはられないですよ。早く仲間達と合流しなきゃ、うん！」

仁藤・近野「!!!!!!!!!!!!!!」

仁藤と近野は後ろに三歩引いたように驚いた。

野中「どうしたんですか、2人とも？」

仁藤と近野はさっきまでの野中美郷から急にいつもの野中美郷に変化したのでたまげてしまったのだ。

仁藤「みちやの変化……。とりあえずだまっとうつか（汗）」

近野「そ……。そうだね。」

2人は3人には聞こえないようひそひそ話した。

佐藤す「あの…。ひそひそ何を？」

仁藤「な……。なんでもないわ！それよりこれからの行動として仲間達と合流するためその場所まで向かうつもりよ。一緒に行きましょう！」

岩佐「どうやって？」

近野「萌乃ちゃん的能力 気で気をさぐってみんなを探すのよ。2人を見つけたのも萌乃ちゃん的能力のおかげ！」

仁藤「今、気を探るわ。」

仁藤は目をつぶり気を探る。その間は沈黙が流れる。そして仁藤は目を見開きわ

仁藤「一番近くて北の方向に2つの気があるわ。そこに行ってみましょう！ちなみに私の能力は誰の気かまでは探れないから、もし敵だったら………すーちゃん頼むわよ！」

佐藤す「えつつ？私ですか!？」

仁藤「この5人で敵に遭遇して戦える能力で対抗できる力を持つてるのあなただけだもの！」

佐藤す「そ、そんなあああ!!！」

野中「頼りにしてるわよ、すーちゃん!!！」

佐藤す「うわあああああん!!！」

佐藤すみれはまたしても半泣きする。

野中「じゃあ、その地点まではまたチカリーナの車で移動するんですか？だったらまた私が運転しますよ！」



仁藤・近野「!!!!!!」

仁藤と近野はその言葉にあの野中の変化を後輩に見せるわけにはいかない、絡むのがめんどくさいとゆう様々な気持ちにより、

仁藤「あ、あ、い、いいよおお！わ、私が運転するから！みちや運転さつきしたから疲れたでしょ？」

野中「ううん！私運転わりと好きですから。楽しかったし、さつき！」

近野「え？みちやさつきの自分の運転してた時の状況の記憶はあるの？」

野中「別にありますけど……変なこと聞きますね！」

仁藤と近野はいろいろな焦りが出始める。それはもちろん【ソウルファイト】関係の焦りではない。

近野「あ、私さつき能力ずっと使って疲れちゃったみたい。だから少し歩いて、能力を使う体力を休んでからまたでいいかな？」

仁藤「そ、そうね！いざとゆうときチカーナの能力使えなくなったら危ないもんね！歩行で移動しましょう！」

佐藤す「どうしました、なんかかみかみですけど？」

近野「いいのよおお！とりあえずみんな北まで歩こうかあ！！」

岩佐「変な先輩達ですね……………」

野中「わかりました。そうゆうことなら、歩いて移動しますか。」

仁藤達は北にある2つの気に向かって歩き始めた。

仁藤達が移動を始めてから数分経ち、【ソウルファイト】は開始から一時間を経過しようとしていた。そんな中、ある場所では、

大家「うわああああ！！！！」

東京都心部をモデルにしたこの場所で大家志津香VS梅田彩香の戦いが繰り広げられていた。

大家は梅田の鋼鉄のパンチを受け、ビルを貫通し吹き飛ばされた。

しかし、大家は立ち上がる。

大家「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。」  
大家の息は大きく荒れていた。

AKB24、2期生、梅田彩香、愛称は梅ちゃん

梅田「やっぱりしーちゃんの鉄の能力はすごいね。すごい防御力よ！もう何回も吹き飛ばされたのにまだ生きてるなんて。」

大家「いや、もうへたへとですよ。すごいな、あやかさんのハンマーの能力は。」

梅田「でもいつまで持つのかな、その防御力？」

大家「さあ、知りたくばもっと強いパンチしてきてくださいよ！」

梅田「いい度胸じゃん！そういうの、嫌いじゃないよ！」

梅田は両手でハンマーを生み出し、それを持ち大家に襲いかかる。大家も体全身を鉄にし、防御体勢をとる。

大家「ぐわあああ!!」

ハンマー攻撃を受け また吹き飛ばされる大家。20分前から行われているこの戦いでビルは数十件は破壊されている。

だが、それは大家の作戦であった。

大家「(これだけ街が破壊されれば誰かこの戦いに気づくはず!そうすれば仲間と合流できるかもしれない!)」

ただそれは大変な賭けであった。

大家「(もし 正規メンバー がこの場所を見つけたら私は死ぬ。それに…予想外だったなあほんとに彩香さん強い!)」

梅田に強がりと言う大家だったがその鉄の硬度は間違いなく徐々に落ちていたのだ。

梅田「ねえ!鉄の硬度落ちてきてない?」

大家「彩香さんの気のせいですよ!」

片目をつぶりウインクする大家。それが積に触ったか力をさらに込め、殴り込む梅田。

大家「あああ！！！」

大家はまたまたビルを貫通し突き抜け吹き飛ばされた。梅田は体がたがたな大家に近づく。

梅田「やっぱり強がりだったんだね！とりあえずしーちゃんもゲムオーバーになっちゃいなよ！」

梅田は身長150センチの小柄な身長からは想像できないくらいハンマーを振りかぶる。あきらめまいと鉄になり両手を塞ぐ大家。その時……

何者かが大家の背を掴み太陽を隠すように空に羽ばたいていった。梅田は紙一重で空振りする。

梅田「なんなのあれ！？」

大家は自分の状況がわからず困惑する。

大家「こ、これは！？」

???「もう、しーちゃんはほんと無理するよねえ！」

太陽の影から見えた顔と翼はまるで大家には天使に見えた。その彼女の名は佐藤亜美菜。翼の能力を持つAKB24には珍しい飛行能力者である。

大家「あみな！！ふっ、やっと来てくれたかありがとう。」

佐藤亜「やっとってどうゆうこと？」

大家「仲間と合流できると思ってさ！」

佐藤亜「まっ、まさか自分が派手にやられてれば誰かが助けにくるとかおもったんじゃないでしょうね！」

大家「危険な賭けだったけどな！」

佐藤亜「もう~~~~信じられない！」

大家「ところであみな、このままどこへ飛んでいくつもりだ？」

佐藤亜「ふふっ！あそこよ！」

佐藤亜美菜は少し高めの丘で降り、掴んでいた大家の手も下ろした。

当たり一面草木がなる丘。そこで佐藤亜美菜は、

佐藤「みみ、みみ！」

佐藤亜美菜は何もない草木に話しかけた。大家は突然の佐藤亜美菜の発言に動揺する。すると、

???「たぶ、たぶ」

その草木から佐藤と合い言葉を交わし出てきたのは倉持明日香であった。倉持は最初おそろおそろ姿を表したが、

倉持「あー！しーちゃん！」

大家と合流し、喜ぶ倉持。しかし、倉持は傷だらけの大家を見てすぐに心配げな表情に変わる

倉持「しーちゃんどうしたの？傷大丈夫？」

大家「ははっ！梅田彩香さんと一戦交えてきてさ、まあ思いのほかきついでよ！」

佐藤亜「明日香、あなたの 治療 の能力で治せるかな？」

倉持「うん！やってみるね！」

倉持は両手を大家に向けた。そこから鮮やかな光の粒が飛び出し、大家を癒していった。見る見るうちに大家の体は回復していった。

倉持「はい、終わりましたよ！」

佐藤亜「さすが、AKB24 研究生メンバーのお医者さん！」

倉持「ははっ！照れるよ！」

大家「ありがとね、もっちい！」



倉持「いえいえ！」

大家「あ、そうだ。2人は他に誰か合流してないのか？【ソウルフ  
アイト】開始からすでに一時間以上経過したみたいだけど。」

倉持「ううん。私達は30分くらい前に合流してそこからしばらく  
歩いていたら、亜美菜が少し遠くからすごい音がするって言って、  
私はここで隠れて亜美菜はその場所に向かったのよ。」

佐藤亜「そしたらしーちゃんがいたってわけ！」

大家「なるほどこの架空世界は思ったたよりも大きい世界みたいだ  
な！私もまだ亜美菜達と彩香さんとしか出会ってないからな！」

佐藤亜「まだ敗退者はちさととまりやんぬだけだね。」

3人の中で沈黙が走る。「敗退者」：存在が消えるとゆづことをま  
だ受け入れられていなかったのだ。

倉持「ちいちゃん…まりやんぬ。」

悲しみを浮かべる倉持。

大家「悲しいのはみんな一緒！それにこれから先はきつとこういったことは続いていく。慣れるしかないんだよ。」

大家は倉持に諭す。

大家「私達4期生がすっかりしなくてどうするの？一応研究生では初期メンなんだからしっかりしなきゃ！」

佐藤亜「そうだよね、しーちゃんの言うとおりだよ！」

倉持「うん、ありがとうしーちゃん。」

佐藤亜「とりあえず、まずは仲間を探し合流しよう。」

3人は丘をくだっていった。

## 第7話 制服が邪魔をする（前書き）

あ、コメントとかいろいろな文章の書き方とかくれたら嬉しいです。

## 第7話 制服が邪魔をする

高城亜樹はどこか2次元を感じさせる街を歩いていた。

高城「あ、この街の石ころ面白い。」

高城亜樹は街の石ころを観察していた。

高城「はやくみんなに会いたいなあ…。」

そんなことを高城が思っていると奥から声が聞こえてきた。声は数人。この街には高城以外にも人がいるようだ。

高城「（誰か来る。隠れなきゃ!）」

高城は街の家の隙間に隠れた。そしてその隙間から人物を確かめるため隠れて見ていた。

????「この街あのアニメの街がモデルだよねえ!？」

????「そうだね!もう、やびゃああ!」

高城「あ、あれはヲタ4！」

ヲタ4とは渡辺麻友、多田愛佳、田名部生来、仲谷明香の4人のAKBのオタク4人を略してヲタ4と呼ばれている。

高城「（ヲタ4何気に全員正規メンバーなんだよね。）」

高城は冷静に思う。そうするといきなり、

渡辺「あきちゃ、近くにいますよ、できていいですよ！」

高城「!!!!!!」

高城は驚愕した。もちろん渡辺以外の3人も驚いていた。姿を見せていない。なのに場所と存在がばれている。高城は仕方なく4人の前に出ることにした。

高城「……………」。

渡辺以外の3人も高城の登場に驚いていた。

AKB24 3期生 多田愛佳 愛称らぶたん

多田「あー、あきちやだあ！！久しぶり…でもないかあ。」

高城「私の場所がよくわかりましたね…。」

渡辺「……………恐縮です。」

AKB24 3期生 仲谷明香 愛称 なかやん

仲谷「あきちやは今1人なの？」

高城「さあ、どうでしょ！」

渡辺「ごまかしても無駄ですよ。1人なのはわかってますから。」

高城はなぜ渡辺が自分の場所を見つけ人数を把握できるのかはわからなかったが、ただわかっていることは「戦うしかない」とゆうこと。

多田「あきちゃ、残念だけど私達は戦わなきゃいけないのお。ほんと、運悪いと思うけど、らぶたんのために死んでね！」

AKB24 3期生 田名部生来 愛称 たなみん

田名部「待つてらぶたん。4人でやったんじゃ面白くないでしょ。私1人でやるよ。」

仲谷「たなちゃん1人で??」

多田「大丈夫なの？」

田名部「大丈夫よ！ 研究生メンバー になんか負けないからさ。」

多田「どうするう、まゆゆ?」

渡辺「わかりました。たなみんなに任せましょう。たなみん、ただあなたは強いけど油断しやすい癖があるからそこは気をつけてくださいね。それにあきちゃは...。」

渡辺の言葉を遮るように、

田名部「大丈夫大丈夫！まあ見ててよ！」

「

田名部は腕からノコギリを生み出した。

田名部「私の ノコギリ の能力で切り刻んでやったからさあ！うっひっひっひ！」

高城も覚悟したように腕から長剣をだした。

高城「私の能力は 剣 。様々な剣系の物を生み出せるんです。どうやら刃物対決になりそうですね。お手柔らかに！」

高城はそれを右手に持ち、田名部もノコギリを右手に持ち、2人は間合いをとりながら、何かの合図を待つかのようにお互いを警戒する。

そして次の瞬間、田名部は飛び出し高城に切りかかった。それを剣の横で受け止める。

田名部は高城を攻撃する。凄まじい猛攻だが、高城はそれをことごとく回避する。



田名部がノコギリを振りかぶると高城は後ろに回り込んでいた。そして田名部の首に長剣をつける。

高城「どうしました。全然当たってませんよ。」

田名部は釈に触ったのか再び高城に振りかぶる。しかし、高城はそれをまた避ける。

気づくと田名部の脇腹から血しぶきが飛んだ。高城は田名部と交差する刹那、田名部を切っていたのだ。

田名部「くっ！ば、ばかななぜこんな。」

高城は冷たい目で田名部を見下ろす。それを見ていた渡辺達。

多田「つ、強い！たなみんなが相手にならないよお！」

渡辺「らぶたん達はあまりあきちゃの戦闘を見たことないんだっけ？私は何回かあるけど、アンダーとしてでてた頃から、彼女の戦闘センスはすば抜けていたんだよ。そんな彼女は周りはどう呼ぶ。天才と。」

渡辺達が話していると田名部のノコギリを高城が長剣ではじきとばす。

田名部「あ……あつ。」

怯えた表情をする田名部。

高城「まだやりますか?？」

田名部「くっ！なあゝらあゝばああ！！！！」

田名部はまたノコギリを生み出した。しかも2本も。二刀流をするつもりである。

田名部「二刀流ならどうかしら?？」

高城「2本でも変わらないと思いますよ。」

田名部「でやあああああ！！！！」

田名部は高城に襲いかかった。しかし、高城は一本の剣でそれを受け流す。

高城「めんどくさなああ！」

高城は田名部の二刀流の間合いに入り、中から田名部の体を切りつけた。

田名部「うわあああああ！」

2本のノコギリを落とす田名部。

田名部「はあ、はあ、はあ。」

田名部の呼吸が荒くなる。それをみている渡辺達。

仲谷「このままじゃ、たなみんやられちゃうよ！」

多田「どうしよう、まゆゆ！」

渡辺「……………」。

高城「これでトドメよ。」

高城は長剣を構え、田名部に向かって切りつける。

高城は田名部の体を切りつけた。

田名部「ぐわあああああ！

田名部は大きな穴の開いた体から大量の血しぶきを吹き、倒れた。  
それを見つめる高城。

高城「勝った。」

田名部の体は消えるそして、

【WINNER 高城亜樹】

【LOSE 田名部生来】

【ネク】に表示された。

仲谷「まさか、たなやんをほんとに倒すなんて！」

高城「上に行くと……決めましたから。」

高城は渡辺達に剣を向け答えた。

多田「たなやん……ぐすん。」

渡辺「……………」。

高城の視線は渡辺達にあった。そう、3人を倒すとゆう覚悟であった。

渡辺「あきちゃ。悪いけど今回は見逃してくれませんかね。」

渡辺の意外な言葉に高城は戸惑った

高城「な、どうゆうことですか？」

渡辺「今は……戦いたくないんですよ。また今度戦いましょうよ！」

多田「え？やらないの？たなやんの仇を討ちたいよ！！」

渡辺「まあ、それは後日にしましょう。では、また！」

高城が気づくと渡辺達は消えていた。

高城「き、消えた。」

その消えた後のなごりを振り返る高城亜樹。

高城「（ふう）、とりあえず……………仲間を探そうかな。」

またいつものマイペースあきちやに戻った高城。

高城「（しかし、おかしいなあ。田名部さんの穴だらけの傷。あれは明らかに私がつけたものではない。いったい、あれは。それに、私あの4人の能力が何なのかわからない。おかしいなあ、現実世界にいたころは知ってたはずなのに。」

そついった疑問を抱きながら高城は歩き始めた。

高城亜樹が勝利したのとほぼ同時刻、少し時間がその一方、森の中では、中塚智美と藤江れいなは強力し、険しい森の中を進んでいた。

中塚「ま、前が見えないですよ。」

藤江「今はとにかく先へ進むのよ。」

2人は小声で話しながら森林の中を進んでいた。

すると目の前には神7そしてAKB24エースの前田敦子が立っていた。

中塚「ま、ま、前田さん!!!!」

藤江「あー、逃げなくちゃあ！」

中塚「ちょっと、押さないてくださいよ。」

前田「……………」。

前田はどうかやら居眠りしているようだ。

中塚と藤江は冷静になり前田を見る。……やはり居眠りしていた。

藤江「前田さんの寝顔かわいいなあ！きたりえとは大違い。」

中塚「あはっ！それ言えてるかも！」

前田「……………れいにゃんとクリス、何してるの？」

中塚・藤江「え！？」

前田敦子は目を開きこっちを見ている。藤江達は林の中から隠れてみていたのに、それを見破る前田敦子。

前田「……………勝負する？」

藤江と中塚は隠れていた林から姿を現し、

藤江「あー私達偶然通っただけで失礼します……………」。



中塚「さ、さよならあー!!」

前田「ばいばーい。」

前田は藤江達に手を振るとまた目をつぶった。そんな前田達を見ずにひたすら森から逃げる中塚と藤江であった。

藤江達の逃げた逆方向から高橋みなみが姿を現した。

高橋「あつこ。誰かいた？私が探してきた方にはいなかったけど。」

前田「れいにゃんとクリスがいた。」

目をつぶりながら独特な言葉でしゃべる前田。

高橋「え！？で、どうしたの？」

前田「別に何もなかったよお。」

高橋「ええええええ!!??ちよつと敦子ねえ、なんで逃がすの!」

前田「だっていつかは戦うし、彼女達と私達がやっても結果はわか  
ってるからそんな焦る必要ないと思って。まだ【ソウルファイト】  
開始から3時間しか立ってないしさ。」

高橋「まあ…わからなくもないけどさ。ただ、私達のこの戦いに賭  
けている願い、それを叶えるためにはさ……。彼女達と戦わなけれ  
ばならないんだよ!」

前田は目を開く。

前田「願いか……。たかみな願いとみんなのそれぞれの願い  
の重みはどれだけ違うのかな。」

高橋「どういう意味?」

再び目をつぶる前田であった。

前田「スウー、スウー、スウー。」

しかも今回はほんとに眠る前田敦子。呆れる高橋みなみであった。

第8話 Virgin Love (前書き)

だいぶ話ながいですね。まあよろしく願います！

## 第8話 Virgin Love

大島優子、篠田麻理子はモデル神戸港の場所にいた。架空世界とはいえ、港にすぎむ潮の匂いや波の音と共に走る数台の船や遊覧船は架空世界とゆうことを忘れさせる。

大島は港と船場の角に座る。

大島「うわぁー気持ちいい！！麻理子見て見て、波に足がもう少しで届きそうだよ。」

篠田「ここは、いい風ね。港がモデルみたいね。」

大島「現実世界に実在してる景色をモデルにしてるからね。それにしてもリアルだね。あの遊覧船とか！

篠田「ええ、遊覧船を走らせたりとかデザインもリアルね。」

微風にあたり2人の髪は揺れる。それから数分、いや数十分2人は会話はせずただ、その景色を眺めているだけだった。

大島「ねえ、麻理子。」

その沈黙とはまた違った静かな空気を緩やかに壊すように大島は篠田に話しかける。

篠田「何？」

大島「本当の自分ってわかる？」

篠田「本当の自分？考えたことないよ、あんまり。」

大島「私はたまに考える。トイレに入った時、お風呂に入っている時。あとみんなとわいわいしている時。」

篠田「そんなこと考えてたの？」

大島「意外でしょ？」

篠田「でも…優子ってそうだよ。表では元気に対して、裏では何か考えている。どっちが本当の優子？」

大島「どっちも本当の私だよ、きっと。その両方の私が私じゃないわけではないもの。」

篠田「……………何が言いたいの？」

大島「この【ソウルファイト】で私初めて抱いた気持ちがあったの。でもその気持ちを知った時素直に受け止めることはできたの。それも本当の自分なんだって。そして、この気持ちこそが私がこの戦いに懸ける想い。」

篠田「その抱いた気持ちって？」

大島「それは言わないよ。」

篠田「言えよっ！」

大島「うゝゝん、じゃあ、10分後に言っね！」

篠田「相変わらず気分屋ね。」

2人は笑いあいながら港の先に見える水平線を眺めていた。

【ソウルファイト】開始から架空世界で5時間が経過した。指原と北原は道と道をつなぐ棧橋を渡っていた。

指原と北原は【ネク】で高城の勝利を知る。

指原「すごいね！あきちゃ、 研究生メンバー 勝利の第一人者だよ。」

北原「そうだね！なんか、仲間が敵を倒したのかと思うと、なんか自分もやらなきゃってゆう焦りが出始めるよね。」

指原「まあ、でもそれは人それぞれだし、倒したからって偉いわじゃないしさ。」

北原「りのちゃん、若干自分に言い聞かせてない？」

指原「い、い、いやー、別に！私も少し慣れてきたし、倒しますよ、私だって！」

北原「まあ、次はね2人で頑張ろうね。」

????? 「こっちは！2人はもうゲームオーバーだよ！」

指原と北原がちょうど栈橋の真ん中にさしかかった時、栈橋の下から腕をドリルにした松原夏海が現れ、ドリルで栈橋の中央を砕いた。

北原「な、なつつみいさん！」

栈橋の下は川が流れており、栈橋と川の高さの差は10mほどあり、川は急流でなかなか深いため危険であった。

そんな川に指原と北原は落ちてしまう。松原夏海は栈橋の手前の道に着地する。

さらに指原達が落ちるのと入れ違いで川から一人の人間が川の中から地上に飛ぶ。

北原「い、今のは!？」

それは 正規メンバー 佐藤夏希の姿であった。松原と同じように栈橋の手前の道に着地。

落ちた2人を見つめる。



指原「きゃああああああ！」

指原と北原は身動きを取る暇もなく川に落とさ流されてしまう。

急流ゆえにもがきながら2人は川下に流されていってしまった。

現在、5人で行動する仁藤達。仁藤達の要望から徒歩で移動していた。

仁藤「ん、ちょっと待って!!！」

近野「どうしたのぉ？」

仁藤「私達が追っていた2つの気がすごい早さで違う方向に離れていき、そこから新しい気が2つ。」

岩佐「え？どういうことですか？」

仁藤「わからない!とにかく行ってみましょう!ほんとにこの近く

だから。」

仁藤達は走ってその場所に向かう。砕かれた棧橋の前にたどり着く。

佐藤「棧橋が砕かれてる。」

野中「ジャンプして向こう側にはなんとか行けるけど……………」。

仁藤「砕かれた棧橋が初めからあったとは思えない。とゆうかさつき砕かれたものみたいね。何かのバトルがあったのかしら。」

????「私達が壊したのよ。」

佐藤夏希と松原夏海が仁藤達の反対側に現れた。

AKB24 2期生 佐藤夏希 愛称 Nなっちい

佐藤夏「萌乃達が……………。まさか、ここでさらに5人も葬れるなんて。」

野中「どうゆうことですか？」

松原「のっは！今、私達は棧橋の下からこの棧橋を砕いてさっしーときたりえを川に落としたのよ！」

佐藤す「な、なんですって！」

松原「しっは！ここの川の流れは早くて川も深いから場合によっては無事じゃないかもね、あの2人！」

近野「そんなあ〜！」

仁藤「さっきの離れて行く気は2人の！でも、【ネク】に表示されてないから、まだ死んだわけじゃないわよ！」

岩佐「そ、そうですよ！あの2人ならきつと無事よ！」

佐藤夏「それよりあんた達少しは自分の心配したら。」

佐藤す「え！？」

佐藤夏「私達は敵同士、対峙した以上戦わなければならぬわ。」

全員の表情が強張る。

仁藤達は棧橋の近くは危険だと思い、棧橋から少し離れた場所に移動する。

松原達も仁藤達を追う。

仁藤「す、すーちゃん、頼んだわよ!」

佐藤す「はい!!!!!」

仁藤達4人は驚く。あんなに怯えていた佐藤すみれの覇気のある返事に。

佐藤すみれは仁藤達4人の前に立ち、

佐藤す「さっしー達をよくも!許さない!.....萌乃さん達は私が守る!」

佐藤すみれは杖を出し、構える。

松原夏海は両腕をドリルにし、佐藤夏希も構える。

松原「なっは！杖だけで私達と戦う気？笑える！じゃあ、いくよお！」

松原は飛び込み、佐藤すみれに襲いかかった。

佐藤す「くっ！サンダー！」

松原の上空に浮かぶ稲妻は松原に向かって落ちる。

松原「ぎゃああああああ！」

佐藤夏「なっつみい！」

松原「りっは！いきなり稲妻が、これは？」

佐藤す「私の能力は杖。そして、その能力により魔法で攻撃することができるのよ！炎、水、雷などの属性攻撃が可能なのよ。」

佐藤夏「魔法とは厄介ね！」

松原「おっは！でも私達には勝てないわよ！」

松原は再び佐藤すみれに襲いかかる。

佐藤す「ファイヤ！」

佐藤すみれは杖をを向け炎を発射！

松原「おっと！」

松原は間一髪で回避。

松原「のっは！あたらないわよ！」

佐藤す「！！！」

佐藤すみれは杖を向ける。松原はもう目の前まで接近した。

松原に氷の塊が飛んでくる。

松原「けっは！また魔法かあ！避けれる避けれる！」

松原は余裕をかますように交わすも着地後水に足を奪われ流された。

松原「つつは！こ、こ、これは！うつぶ。」

松原はその水からなんとか抜け出す。

佐藤夏「い、今のはいったい！」

佐藤す「W魔法よ。魔力をそこそこ消費するけど一度に魔法を連発できるのよ！」

松原「はっは！くそお！！こうなればなっちい、2人で行くわよ！」

佐藤夏「OK！あ、あとね…。」

佐藤夏希は何か松原に軽くささやく。それを聞く松原はにやりとした。

会話を終えた松原と佐藤夏希は独特なステップを踏み、佐藤すみれを混乱させようとする。

松原「せつは！今よ」

2人で一斉に飛びかかる。

佐藤す「サンダー！」

佐藤すみれは松原めがけサンダーを放つ。

松原「おっと！」

上空から襲うサンダーを松原は回避。一度見た技を回避できるのはさすが 正規メンバー と言ったところか。

佐藤す「からの、ファイヤ！」

佐藤すみれも負けじとW魔法で対抗する。



松原「どはああああ！」 W魔法をまた避けられなかった松原。右手を燃やされ倒れこむ。

佐藤夏希も佐藤すみれに襲いかかるも、佐藤すみれは佐藤夏希の間に合いに入り、持っていた杖をすぐ松原に掲げ。

佐藤す「ファイヤ！」

まばゆい炎が佐藤夏希の全身を燃やす。

佐藤夏「ぐはははっっ！」

佐藤夏希は佐藤すみれの手前で倒れる。

後ろで見ていた仁藤達。

近野「す、すごいすーちゃん！！予想してたより強い。」

仁藤「ええ！彼女は普段臆病だからそこまで自分の力に自信が持っていないのが難点だけど、能力事態は高いのよ。ただ…。」

佐藤夏希「ぐぐぐぐ！」

佐藤夏希は腹を押さえている。

佐藤す「すいませんが、トドメを刺させていただきました！」

佐藤夏「ふふっ！」

その瞬間佐藤夏希は一回転し、佐藤すみれのつまさきを蹴り、地面に倒した。

佐藤す「きゃああ！」

佐藤夏希は倒れた佐藤すみれの胸ぐらつかみ、一本背負いして地面に叩きつける。

佐藤す「うわああ！」

佐藤すみれは血反吐を吐く。佐藤夏希は倒れた佐藤すみれを立ち上げ、佐藤すみれを十の字固めし体を抑える。

佐藤夏「かかったわね！私達はとにかくあなたに近づくことを目標にしたのよ。杖をターゲットに向けないと魔法を使えないこともわかったしね。」

仁藤「くっ！まずいわね。すーちゃんの弱点が格闘戦・接近戦とゆうことがばれてる。」

松原夏海も立ち上がり佐藤すみれに近づき

松原「いつは！なっちいしっかり抑えといてね。また杖を向けられたらやだからさ！」

佐藤す「やだあ！離してよお！！」

佐藤すみれは必死でもがく。

佐藤夏「はいはい大丈夫！今なつつみいのドリルであなたの心臓を貫いてあげる。で、現実の世界でなんていったか聞いてあげるから。」

松原は両腕をドリルにする。

松原「きつは！さっきの痛かったからさ……。じわじわ殺そうか！心臓からじゃ面白くないから。」

松原のドリルが佐藤すみれに近づく。鈍いドリル音はすぐにでも必死でもかく佐藤すみれを貫きそうであったその時、

野中「はあああああ！」

野中は右手の平から墨を発射した。野中美郷能力 黒墨

松原「めっは！?!?!?!」

松原はそれに運良く気づきしゃがむ。その墨は佐藤すみれの目に命中した。

佐藤す「きゃあああああ！」

視界が見えなくなった佐藤すみれ。野中は松原の視力を墨で奪う作戦だったが、回避され仲間の佐藤すみれに命中してしまったのだ。

近野「あー！な、なんてことを！」

野中「そ、そんなぁ…はずした！ご、ごめんすーちゃん！！」

松原「んっは！みちやは黒墨の能力だったのね。どうやら私を狙ったみたいだったけど残念だったねえ！」

佐藤夏「おとなしくしてなさいよ！すーちゃんの次はあなた達だから。」

岩佐達は拳を握り怒りを現す。しかし仁藤1人現実を見ていた。

戦闘タイプではない自分達に何ができるねだろうか。

仁藤は小声で

仁藤「みんな、チャンスを待つのよ。今は我慢して。」

野中「嫌です！さっきは足引っ張っちゃって私達も少しは役立たないと！」

仁藤「今、私達が行っても意味ないわよ！」

岩佐「どーせなにもできずやられるなら今戦いにいってすーちゃんを助けます！」

近野「そのとーり!!」

近野・野中・岩佐は松原夏海に向かっていく。

松原「をつは!あとでちゃんと料理してあげるって言ったのに……。

」

岩佐は右ストレートパンチを繰り出すも松原はそれを回避。そこから岩佐の連続攻撃。

松原は紙一重で回避し、岩佐の体にドリルをあてる。

岩佐「あああああああ!」

ドリルは岩佐の腹に当たった。岩佐の体から血しぶきが飛ぶ。体を抑えこみ倒れる岩佐。

野中と近野も向かっていく。

野中「はああああ！」

野中は右手の平から墨を発射！再び松原の目を狙う。

松原「かつは！当たらないよお！」

松原夏海は顔を傾け回避。

近野「でやああああ！」

しかし、松原が避けた瞬間近野は松原の顔に渾身の右ストレートを入れる。

松原「ぐおお！」

松原の顔から痰唾が飛び、松原は少し吹き飛ばされた。

近野「や、やったあ！」

佐藤夏「へえ！やるじゃん。」

佐藤すみれを押さえながら余裕な言い方で松原の後ろで佐藤夏希は言う。

しかし、松原はすぐに態勢を立て直し、近野の肩を攻撃する。

近野「いやあああああ!!」

松原「たっは！良いパンチだったけど、効かないよ。」

近野の肩から血が溢れ出し、近野は肩を抑えた。

野中「(どうしよう!なんとかしなくちゃ。)」

野中は先程自分のミスを改めどのようにチャンスを作るか考えていた。

野中「……………いちかばちか、やってみるしかないわね!」

野中は仁藤を見て、何かを伝えようとする。

仁藤「(な、なにをするつもり?)」



仁藤は野中が自分に何かを伝えたいことはわかったが、何を伝えたいのかはわからなかった。

野中「行くわよ、なつつみいさん！」

松原「せつは！貫いてあげるわ！」

野中「くらいなさい！！！」

野中は飛び込む。しかし、その先にいたのは松原ではなく、佐藤すみれを捕まえている佐藤夏希であった。

松原「るっは！な、なに！」

佐藤夏「くっ私を狙って！」

佐藤夏希は佐藤すみれから手を離し、空中で墨を発射しようとする野中の腕をつかみ地面に体を叩きつけた。

野中「ぐはあ！」

しかし、野中はその瞬間一瞬仁藤を見た。

仁藤は野中から伝えたかったことをその一瞬で理解した。

そして、仁藤は次の言葉を発した。

仁藤「すーちゃん、右よ！」

今、佐藤すみれは目は見えない状態だが、無防備な状態であった。

佐藤すみれは仁藤の言葉に耳を傾け、見えない目で右に杖を掲げ、その先には松原夏海がちょうど現れる。

佐藤夏「し、し、しまった！」

松原「よっは!？」

佐藤す「エクスプロージョン!!」

佐藤すみれの杖が光り輝いた。その光は松原夏海を捕らえる！

松原「てっは！な、な、なに！」

松原夏海の体を捕らえた光は打ち上げ花火のように激しく爆撃音とともに爆発した。

松原「いつはあああああああ！！！！！」

松原夏海の体は粉々に砕け散る。その瞬間、全員のネクに表示される。

WINNER 佐藤すみれ

LOSE 松原夏海

佐藤夏「な、な、なつつみいいいい！！！」

近野「や、やったの??」

野中「み、みたいですね。」

野中は一瞬の笑みを浮かべながら答えた。

佐藤夏希は唇を噛み締め、こちらを睨む。

佐藤夏「よ、よくも！」

岩佐「でもまだ夏希さんが！」

仁藤「それはどうかしら。」

仁藤の言葉に岩佐達は耳を傾ける。

岩佐「どうゆうことですか？」

仁藤「考えてみてよ。なっちいさんさっきから通常の格闘はしたけど能力は使っていないわ。戦闘力も私達とあまり変わらない気がする。。このことから考えられるのはなっちいさんは恐らく戦闘タイプじゃないわ。」

佐藤夏希の顔が引きつる。

佐藤夏「くっ！」

仁藤「私の読みが正しければむしろ有利なのはこっちよ！逆になっ  
ちいさんに聞きます！まだやります？」

佐藤夏「くっ！」

野中「なるほど、そういうことだったんですね。たしかに、さっき  
叩きつけられた時も大したダメージではありませんでしたよ。」

近野「それが本当なら………覚悟しなさい！」

佐藤夏「ふん！」

佐藤夏希は先ほど砕いた棧橋の方へジャンプする。

野中「なっ！」

佐藤夏「さすがね、素晴らしい洞察力だわ萌乃。ただし、少し違う  
わよ、あなたの読みは！」

仁藤「なんですって！」

佐藤夏「私の能力は……【えら】。水中で効果を発揮する能力なのよ。地上だとパワーは半分しか出せないのよ。」

岩佐「水中で効果を発揮する能力……。」

佐藤夏「今回は一旦退くけど、くれぐれも水中には注意するのね。水中対決なら誰一人私には勝てないわ。」

そう言い残し、佐藤夏希は棧橋の下に流れる川に飛び込んだ。

野中「あ、逃げちゃう！追いかけてしょう！」

仁藤「いや待って！！いいのよ、逃がして。」

近野「どうゆうことおお??」

仁藤「すーちゃんを見てみなさい。」

そこには魔力を使い、少しよろよろの佐藤すみれの姿があった。

岩佐「すーちゃん大丈夫？さっきからそういえば静かだったわよね

！」

佐藤す「大丈夫よ、たださっきのエクスポーションって魔法はなかなか魔力を 使うからそれで力抜けちゃって。」

仁藤「賭けだったのよ。なつちいさんがもし戦闘タイプですーちゃんの状態に気づいていたなら、私達の負けだったかも。」

野中「それであんな強気な発言を。まったく無茶しますねえ！」

仁藤「それはみちやの方だよ！もし私があなたの作戦に気づかなかつたらなつちみいさんに体貰かれて終わってたわよ。」

野中「まあ……………賭けてましたから。」

近野「そういえばさっき妙なコンビネーションだったわよねえ？」

仁藤「みちやが叩きつけられた時、気づいたのよ！自分を囿にしてなつちいさんとすーちゃんを引き離せたってね！そこから、全体を見渡せる私がすーちゃんに敵の場所を教えるとゆうみちやの無謀な作戦。」

岩佐「そんな一瞬で気づくなんてすごい!!」

仁藤「まあ、なんかみんな無茶したりして切羽詰まっていたからね。脳がフル回転したのよ。」

岩佐「すーちゃんもよく萌乃ちゃんのことを聞いたよね。」

佐藤す「信じてたからね!」

仁藤「まあ、そんなとこよ。とりあえずすーちゃん。その川で顔を洗ってきたら!」

佐藤す「はい、そうします!いつまでも前が見れないのはきついです。」

近野「棧橋の近くの階段を下りれば、川のすぐ近くまで行けるみたいね。気をつければ顔くらい洗えるんじゃないかしらあ!」

野中「本当にごめんね、すーちゃん!」

佐藤す「全然いいですよ!」



5人は階段を下り、川に近づいた。佐藤すみれは目が見えないため、野中が佐藤すみれの肩を担ぎゆっくり歩いていった。

川の近くにつき佐藤すみれの顔を岩佐と野中が手で目をあらってやった。

落ちないように気をつければ水もきれいで顔を洗うこともできた。

佐藤すみれ達の顔を洗いながら

近野「でも、すーちゃんがいて、ほんとによかったわね！とりあえず、一人倒したんだしさ。」

仁藤「そうね、ただ一つ疑問に残ることがあるのよ。」

野中「疑問に思うこと…ですか？」

仁藤「私、あの2人の能力がなぜだかわからなかったの。チカリィナ達4人の能力はわかるのに…。」

野中「それ私もです。おかしいですね、現実世界で 正規メンバー

達の能力は知っていたはずなのに……。」

近野「私もだよお！私達がそうってことはすーちゃん達もそうだったのかな？」

岩佐「私もわかりませんでした。」

佐藤す「変ですよ、ほんと。ちなみに 正規メンバー も私達の能力を知らない感じでした。私やみちやさんの能力に驚いてたし！」

仁藤「たしかにそうね。」

近野「萌乃はこの件についてどう思ってるんでしょうかあ？」

仁藤「なにその不自然な敬語！多分、相手の能力を始めから覚えてたら対策を練れるからじゃないかな。お互いの能力を知らない状態で何も対策がない状態で戦うのがフェアと考えた……とか。」

野中「な、なるほど！なんか納得ですね。能力がわからなければ、対策を練りようがないですもんね……。」

仁藤「そのためにはすーちゃん以外の戦闘タイプのメンバーを早く集めなきゃね！」

佐藤す「そうですね。これからどうするんですか？」

仁藤「なつつみいさん達が行ってたけどさっきさっしー達を川に落としたりして行ったでしょ？でも、【ネク】で彼女らの死亡は表示されてないからまだ生きてるはず。だから、この川に沿って歩きましょう！」

近野「気はちゃんとでてるの？」

仁藤「微妙にだけど！」

野中「でも、そうになるとまたなつちいさんに会ってしまっくんじゃ！」

仁藤「大丈夫、今一番近くにあって移動している気が彼女の気だから、その気に気をつけながら移動すれば会うことはないわ。」

近野「なるほどねえ！ちなみにすーちゃんはどれくらいで魔力は回復するの？」

佐藤す「そうですね、20分も歩けば自然に回復するかと思いますよー！」

「仁藤」よしーじゃあ、この川に沿ってさっしー達を探しましょう。」

「さっしー達を探して仁藤達はその川に沿って道を下り始めた。」

## 第9話 軽蔑していた愛情（前書き）

もう少ししたら登場した能力で誰が何の能力かのまとめ表を作ろう  
と思います。誰がどんな能力か忘れちゃうとね。

## 第9話 軽蔑していた愛情

一方、流された北原達は……。

北原は棧橋から落とされ川に流されるとすぐに指原をつかもつとす  
る。

指原はすでに気を失っていた。そのためいろいろ面倒であった！

北原「りのちゃん、目をさまして！」

北原は指原を呼ぶも指原は気づかない。

流れが早いため泳いでも少し距離のある指原までたどり着けなかつ  
た。

その時、何かズボンに引っかかり、北原は流れなくなった。

北原「！！流れない！ズボンに何か引っかかったんだ。あー、りの  
ちゃん！！！！」

指原はどんどん離れていきあつとゆう間に見えなくなった。

北原「りのちゃん……。」

北原はとりあえず、ズボンに引つかった草を取ろうとする。その時ふと気づく。右を見てみると洞窟が広がっている。

幸い、引つかったものを外したと同時に洞窟の道に捕まればそこを登って川から上がり洞窟に入れる。

指原の安否は気になる。しかし、炎の能力者の北原は長時間川に入ることは能力者として著しく体力を奪われるのだ。仮にこの流れにそって指原を追っても追いつくのは難しい。そう考える北原はとりあえず一回川から上がることにした。

北原は引つかかったものを外し、洞窟に入った。先は真っ暗で何も見えなかった。

北原はバスケットボールほどの炎の玉を作り、それを手のひらの上で浮かせる。

北原「能力が炎でよかった……。」

北原は洞窟の奥へと進んでいく。

洞窟はとても暗く湿気があり、リアルにコウモリも飛んでいた。

北原「あー、怖いよお……。奥に行けば行くほど暗くなっていく……。」「歩いてしばらくたつ。一向に出口は見えてこなかった。」

北原「うーん、この洞窟にきたのは失敗だったかなあ。……。……。  
……。ん！？人の気配を感じる！こっちに向かってきてる。」

北原は身構える。敵か味方かはわからないが、自分の第六感が2つの気配が近づいていることを感じた。

そこから現れたのは……。

内田「ん！？きたりえ！？」

そこから現れたのは 研究生メンバー

内田真由美と石田晴香であった。

北原「あー、はるきちゃんにうちー！」

内田達との再会に喜ぶ北原。



北原「2人はそっちからきたの？」

内田「うん！はるきゃんと合流して洞窟入ったんだよ！」

北原「じゃあ、このまままっすぐ進めば出口に出るの！」

石田「ううん。途中で十字路があつて私達はそれを右に曲がつてきたらきたりえに会つたのよ。」

北原「なるほど！私が来た方向は川が流れてるだけだから、とりあえずその十字路まで行ってうっちー達が来でない出口を探しましょう。」

内田「そうね、とりあえずその十字路まで行きましょう！」

北原達はそこからまた直進し始めた。

秋元才加はある場所をモチーフにした山に転送され、そこを降りきる手前で宮澤佐江と合流。2人は今洞窟の前にいた。

秋元「山を降りたと 思ったら今度は洞窟かあ。」

宮澤「まあ、とりあえず進んでみようよ!」

2人は洞窟の中に入っていく。

洞窟の幅は思いのほか広く、人が4列ならんでも歩けるほどで高さはそこそこあった。

洞窟を進む途中、

秋元「佐江。」

暗闇の中で宮澤佐江が話しかける。

宮澤「なに?」

秋元「佐江にだけ言いたい。私はこのバトル自体に反対なの。」

宮澤「え？どついつけと？」

秋元「だって 正規メンバー を戦いで決めるなんて馬鹿げてよ。それに架空世界とはいえ仲間を傷つけるなんて私にはできない。」

宮澤「あー、まあたしかに。でもみんないろいろな思いを掲げてるんだからそれに答えようとは思わないの？」

秋元「それはわかるよ。指原の意気込み聞いた時、その他メンバーの目を見たときそういう思いは伝わったよ。でもその気持ちに答えるくらいの気持ちがある今の私にはないの。」

宮澤「……………じゃあ、もしここで敵の誰かに遭遇したらどつするの？」

秋元「それは……………」

秋元はその質問には答えなかった。そして2人は歩き続けた。

歩いてしばらくすると近くからいくつかの音がすることに気づく秋元と宮澤。

宮澤「人の音がするわね。」

秋元「ゆっくり近づいてみましょう。」

2人はおそろのおそろの音が聞こえる方へゆっくり進む。

???「ここがうちー達が言ってた十字路かあ。」

???「どう進むの?。」

???「そうね…とりあえず。」

秋元は声のするほうへどんどん近づく。声の主達は北原里英、石田晴香、内田真由美であった。

北原達も秋元達に気づく。

北原「あ、あ、秋元さん！佐江ちゃん。」

宮澤「きたりえ、うちー、はるきちゃん。」

内田「ま、まわまさかこの2人に会うなんて……………」

石田「……………」

秋元「3人に聞きたいんだが…。」

その言葉を遮るように。

北原「くっ！よりによってこの2人に…。でも戦うしかない！行くわよ」

きたりえは焦った顔

で手を炎の拳に変えようとする。しかし、炎はでなかった。

北原「え？う、うそ…炎がでない。」

秋元「無駄よ。佐江の能力【無効】により佐江から半径一キロ以内にいる能力者はすべて能力が使えなくなるわ。」

内田「の、能力が使えない!？」

北原「くっ！なら格闘戦よ!」

北原は拳を握り秋元に殴りかかる。

しかし、秋元はそれを右手で止め、北原の動きを止める。

北原「(う、動けない。)

秋元「話を聞いて。私には今戦う意志はないわ。……何もしないからあなた達が来た方向を教えて。」

秋元は真面目な視線で北原に問いかける。宮澤はそれを黙ってみていた。

北原の手は秋元は離す。北原は一呼吸置き、しゃべる。

北原「……………私達はちょうど秋元さんが来る向かいの道から来ました。しかし、この先は急流な川が流れてますよ。」

内田「ちなみに私とはるきゃんは先程きたりえと今来た道から合流したんですが、この左の道から元はきたんです。まあ、ただの草原でしたけど。」

秋元「なるほど、では私達はうつちー達が来た道に行く。あなた達

は残りのあなた達から見て右の道を行きなさい。」

北原「ちなみに秋元さん達の道はどんな感じだったんですか。」

秋元「山だったわよ。特に何もなかったし、登らなくてもいいと思うわよ。だから、あなた達は残りの道を行ったほうがいいと思うんだけど……。」

内田「なるほど……わかりました！」

秋元「それじゃ……。行くわよ佐江。」

2人はそこから右に曲がり内田と石田の通ってきた道を行った。

北原「秋元さん……佐江さん……。」

内田「秋元さん戦いたくないって言ってたけど……。」

その時3人の【ネク】が鳴る。その音は佐藤すみれが松原夏海に勝利したことを告げた。

北原「あー、すーちゃんがなつつみいを倒したみたい！すごーい！」

内田「あきちやも入れてこれで 正規メンバー を2人倒したんだね！」

北原「ほんとすごいわぁ！！！」

石田「あのお……。」

そんな2人の盛り上がりを遮るように石田のツンとした言葉が走る。

石田「とりあえず早く行かない？ここで立ち止まるのも変だし。」

内田「……………まあ、それもそうね。」

3人は秋元の言われた通り残りの道を歩き始めた。

北原達が歩き始めたのと同時刻。宮崎美穂はモチーフはハワイの海の浜辺歩いていた。



宮崎「んんん！ここも誰もいないかあ……。ソウルファイト開始から五時間。誰にも会わないなんて。私以外のみんなは合流してるのだろうか……。」

【ソウルファイト】5時間経過から宮崎美穂は誰にも遭遇していなかった。佐藤すみれも勝利を収め、本格的な戦いの始まりに自分の参加率のなさに不安を抱いていたのだ。

宮崎「こんなにいい浜辺も不安のせいで落ち着いてみれないよ！ああああ誰かに会いたい！！！！」

「???」大丈夫。私がみやおの最初の遭遇者、そして一緒に行動してあげる！」

突然どこからか声がし驚く宮崎。宮崎は当たりを見渡した。

宮崎「びっくりしたなあ！だれだよお！」

「???」「ここだよお。」

宮崎の背後に現れたのは多田愛佳であった。

宮崎「らぶたん!?!」

多田「みやお、私の物にな〜れ!?!」

多田は両手を広げ前に出し、怪電波を発射する。

宮崎「な!?!」

多田「もうみやおは私の物。そうだよな?」

宮崎「……………はい。」

多田は宮崎を仲間に入れた。自らの能力【洗脳】によって…。

多田「まゆゆとなかやんどこ行っちゃったのよ…。とりあえず、みやお大好き!ずっとそばにいてね!」

宮崎「……………はい。」

その瞬間、物陰から多田と宮崎の前に 正規メンバー 峯岸みなみが現れる。

多田「み、峯岸さん……。」

峯岸「見てたわよらぶたん。……1人が嫌だったのね。だからみやおを洗脳したのね。」

多田「……はい、1人で寂しかったから……。」

峯岸「もっと仲間を増やしたくない？」

まるで悪魔のささやきのように峯岸は言う。

多田「ほしい！1人はやだ。」

峯岸「私からぶたんの行きたい場所を教えてあげる。」

峯岸みなみ。能力【衛星スパイ】。透明の衛星スパイを生み出すことができる。さらにそこから峯岸の持つ小型パソコンで衛星の写し出す映像を監視することができる。

峯岸はジャケットポケットに入れた小型パソコンを開く。そして現

在衛星が映している映像を多田に見せた。

峯岸「今から、ここをまっすぐ走れば仁藤萌乃・近野莉菜・野中美郷・岩佐美咲・佐藤すみれのいる地点に合流できるわよ。」

多田「5人も人がいる。5人をらぶたんの仲間にする……。」

峯岸「じゃあ、行きましょう！私もついていくから。」

多田と峯岸は歩きだした。

同時刻。大家志津香・佐藤亜美菜・倉持明日香は丘を下り、宮崎美穂のいたグアムをモチーフにした海の浜辺にたどり着いた。

大家「いやー、水が透き通っててきれいな海だね！」

倉持「水着があつたら泳ぎたいね！」

佐藤亜「亜美菜は体に自信ないからあまり……。」

倉持「でも好きな人とかできたら夜の浜辺で一緒に語り合いたいなあ。」

佐藤亜「それぞれたまんないよねえ〜!」

佐藤亜美菜と大家志津香達が盛り上がる中、大家だけは静かだった。

大家「……………」

佐藤亜「しいーちゃんどうしたの?」

大家「この海の潮風にセクシーフェロモン乗せてる河西智美さん…  
…いるならでてきなさいよ!」

倉持「ええ!!!」

大家達の左斜め横にある岩場の上に河西智美は座っていた。

河西「あ〜やっぱりわかつちやった!?!」

大家「潮風にこんだけセクシーな香りを漂わせてれば普通気づきま  
すよ。」

倉持・佐藤亜「き、気づかなかった……………」

河西は岩場をジャンプし大家達の前に着地。

河西「まあ、気づいてくれたんならそれはそれでチュウはうれしいよ！なんか素通りしそうな気配あったしね。」

3人は戦闘ポーズをとる。

河西「まあまあ。チュウは戦いに来たわけじゃないの。3人〴〵を仲間のもとに〴〵連れて行こうとしただけよお。」

大家達の顔が赤くなる。彼女らは徐々に河西に夢中になっていく。

河西「さあ、もっとチュウだけを見てえ。」

3人は河西に釘付けになる。

どンドン…どンドン…河西智美に近づいていく。

河西「さあ、チュウのところに来て……………」

河西は一步ずつ後ろに下がっていく。そして河西に釘付けにされ、半日な大家達は河西についていく、一步ずつ。

仁藤達を探し始めた峯岸と多田だったが、一旦峯岸は多田を止める。

峯岸「（そろそろね……。）らぶたんちよつとストップ！」

峯岸と多田は歩いてきた足を止める。

多田「どうしたんですか……………」。

峯岸「ええと…………、あと数十秒で来るわね…………」。

峯岸「右を見てごらん。」

多田は峯岸の指示通り右を振り向く。

右隣から河西智美…

そしてそれについてくる大家志津香・佐藤亜美菜・倉持明日香の姿があつた。

多田「こ、これは?？」

峯岸「とも〜みちゃんの【フェロモン】の能力ね。フェロモンを放ち、自分に釘付けにさせる能力よ。まあ洗脳に近いけど、らぶたんのとはちよつと違うけどね。」

多田「どこが違うんですか?？」

峯岸「まあ、とも〜みちゃんのは一時的に相手を自分に引きつけるだけなのよね。あとは洗脳しているものに何かが触れるとすぐ洗脳が溶けてしまつとゆうことね。」

多田「ふう〜〜ん。」

峯岸「とりあえずらぶたん、とも〜みちゃんが来たら2人の背後の近くに行つて3人を洗脳するのよ。」

多田「もしかしてそのためにとも〜みさんは?？」



峯岸「そうよ。いい？ともくみちゃんがフェロモンを解いたらすぐ洗脳するのよ。そうすればあの3人は…らぶたんのものよ。」

多田「わかりました。」

河西は後ろを向きながら峯岸達に近づいてきた。そして、後ろを向き、峯岸と多田に合図を送る。

峯岸「さあ、らぶたん洗脳開始よ！」

多田は大家達3人の背後に周りこんだ。

と同時に河西は指をパチンと鳴らす。その瞬間大家達3人は正気に戻った。

倉持「え！？ど、どうなったの？」

佐藤亜「私達確か、ともくみさんをみていたら意識がとんで…。」

大家「…いったいどうなって…。……………後ろになにか？」

多田「しいーちゃん、亜美菜ちゃん、もっちい、私の物にな〜れ！」

多田は両手を前にだし、そこから怪電波を大家達に放つ。

大家達「きゃああああ！！」

怪電波を浴びた大家達は悲鳴を上げると、静かになった。

多田「3人ともらぶたんの物だよね？」

大家・倉持・佐藤亜「……………はい。」

峯岸「ふふっ！さあてらぶたん次のらぶたんの物を探しに行くわよ。  
仁藤萌乃達を！」

多田「はい！みんならぶたんの物にするんだから。」

河西「ふふっ、らぶたんかわいい。」

3人は次の標的仁藤達を探すため歩き出した。宮崎美穂・大家志津

香・倉持明日香・佐藤亜美菜とゆづしもべを引き連ねて……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2942x/>

---

AKB24 ~ THE PRESENCE ~

2011年10月26日02時59分発行